教育学の政治的役割

ヘルバルト教育学の比較史的考察試論

竹　中　暉　雄

はじめに

比較教育思想史の任務の一つは，言うまでもなく，個々の教育思想が一体何を主張したのかを，他の教育思想との比較を通し，様々の外的諸要求との関連において明らかにすることである。それは外的諸要求がいかにしてそのような主張をする教育思想を形成したかを分析することによって，今日的外的諸要求に囲まれるわれわれが，既成の教育思想，あるいは新しく創造すべき教育理念への態度を決定する際の手がかりを獲得する仕事であり，それは，教育思想の，いわば〝静態面〟を取り扱う。

しかし一度誕生してしまった教育思想は，自分の生まれ出た社会的あるいは論理的胎盤のことなど，サラリと忘れて，ひとりでに歩き出すことが応々にしてある。つまり生まれた時は全く無力な一つの思想が，再び種々の外的諸要求を担う実践家たちによって受け継がれ，あるいは時代々々の権力によって支持されて，現場に適用された時，それは巨大な現実的力を発揮することができ，時には一国のいかなる山村僻地の学校内の情景をも一変させうるのであるが（たとえば敗戦後のわが国における新教育理念のように），同時にその時，その思想は，継承者たちの色々な〝解釈〟という調味料で味付けされることによって，大きな変身をしてしまっているかも知れないのである。そこで比較教育思想史の第二の任務が登場するのである。われわれは今度は，ある教育思想の〝活動状況〟，つまり〝動態面〟をも追跡しなければならない。つまり，いったん産声をあげたある思想が，その本来の意図に従って，あるいは反して，現実にどのような役割を果したか，また時代が変化することによって，あるいは空間が移動することによって，いかに歓迎され，また拒絶され，あるいは歪曲されて受容されたかを，そうした事実を生んだ背景・原因を探求して行きながら，明らかにしなければならない。この仕事は，当然もとの思想がいかなるものであったかの研究を伴わねばならないという理由もあって，そう容易には達成できないが，しかしこの作業を済まさないことには，一つの教育思想が，雲の上の観念の御殿の中においてではなく，現実のこの地上において，一体いかなるもので，どんな働きをしたか，評価を下すことはできないのである。本論はヘルバルト教育学を主に政治的観点から取り上げて，そうした両側面からの研究を志向しようとする計画への一試論である。(1)

(1) なお，その動的側面の一部は，別稿に譲った（『比較教育試論』第4号「教育学の政治的移植——明治ヘルバルト主義の場合——」予定）。

1. ヘルバルトの不人気

一般的に言ってヘルバルトと言えば，とかく教育史の舞台上での〝悪役〟（それは不可欠の役割でもあるが）扱いをされてきたように思われる。ルソー，ペスタロッチ，エレン＝ケイ，そしてデューイなどの教育学が，児童の解放を実現し，彼らに自由を贈った〝暖かき教育学〟として好意的な眼で見られるのに対して，ヘルバルトのそれは，旧教育学の代表であり，詰め込み主義を考案し，子供には非活動を押しつけた〝冷たき教育学〟と敬遠され勝ちである。イギリスでヘルバルトが注目され出した20世紀初頭前後，ヘルバルトは「個性を無視した」，「実際的生活の諸要求を忘れた」，訓練のことを過少評価し，教授のこと以外は何も考えなかった，自然科学に「無関心」であった，等の非難の声が多かった，という。「しかし何ということだ！ 私は彼自身を研究してみて，これらすべての非難がバカバカしく間違っており，全く事実の逆であることを発見した」とは，F. H. Hayward の言である。(1) もちろん人気・不人気というのは，評価する側の主体的条件に左右されるのであるが，カント以後の思想家の中で「ヘーゲルの次にランクされてきた」にもかかわらず「尊敬されはしたが，決して愛されることのなかった学者」(2)とは，一応妥当な線であろう。

政治的にはゲッチンゲン事件もからんで，ますます人気は下降する。そして次のような評価が下されたこともあった。たとえば東ドイツの学者はヘルバルトを「反動」ときめつけ，「ドイツのブルジョワジーが隆盛化し，そして政治的・社会的前進のために闘った時代に」，独自の倫理学で「保守的な教育目的—歴史的に老朽化した社会秩序への人間の秩序づけに奉仕する—を基礎づけた」のが彼で，そして彼は「封建的・絶対主義的国家の贈物としての改革……を期待した。彼は君主・ユンカーの，そして富裕・教養階級の利害の擁護者であった」と評定し，(3) またコンスタンチーノフ監修の『世界教育史』(1)によれば，「ヘルバルト教育学は，19世紀前半における，ルソーとペスタロッチのブルジョワ民主主義教育思想に対する闘争の，反動的プロシア主義の思想的砦」であり，ヘルバルトの遺産のうち最も反動的なもの，特に児童の管理に関する思想は，

---

(1) "The Meaning of Education" (1907) Preface. なお日本ではヘルバルト主義は5理念や教授法に力点がおかれて導入されたため，軟教育というイメージは持ちにくかったが，イギリスやアメリカでは，興味に強調がおかれたため，軟教育と解釈される傾向も強かった。たとえば Hayward があげている非難の例の一つには，これらの他に「ヘルバルトは学校での仕事を容易にそして『おもしろく』することによって，それを去勢する」というのがあり，W. James はアメリカでのこのような解釈に反対して「ヘルバルト派の興味説は，原理上からしては，教育法を軟弱ならしめるとして非難さるべきではありません。もし軟弱にするとすれば，それはその運用がまずかったがためなのです」とのべている（「心理学について」(1899)『ウイリアム・ジェイムズ著作集』(1)日本教文社，p. 35)。

(2) "Historical and Philosophical Foundations of Western Education" S. E. Frost, p. 378～9.

(3) "Geschichte der Erziehung" K. H. Günther 他 S. 250～1, 初版1956年。Karl Schrader も「広範な国民大衆とは彼はいかなる関係も持たなかった。このことから彼の保守的，いや反動的な社会的政治的態度を理解することができる」と言っている（Die Pädagogik Herbarts, "Pädagogik" 11巻8号, S. 565)。

その後ファシスト教育学者が，自分の見解を裏づけるために利用したのだという。[4]

わが国の明治時代においては，別稿で考察するごとく，偏狭な排外主義からこれを拒否する主張もあったが，大勢的には国体によく合うとして（よく合うように料理しなおされたから当然なのであるが）歓迎され，日清戦争後，その倫理的側面の有効性を喪失してからは，専ら教授法の形骸のみが，国定教育内容の効果的注入法として生きつづけ，ここでも体制への奉仕者として評価はよくなく，特に戦後，アメリカ教育学の華々しい流行のためにその影はすっかり薄れてしまった。

しかしながらヘルバルトの体系の一部分のみを顕微鏡的に拡大強調解釈したり，「ヘルバルト主義」という言葉がもたらす先入観にとらわれている限り，われわれは，イタリアでの最初のマルクス主義者といわれる Antonio Labriola (1843～1904) が，なぜ「おそらく――むしろ，きっと――わたしは，わたしの（厳格に）ヘーゲル主義的な教育の結果，ヘルバルトの心理学とシュタインタール〔彼もヘルバルト主義者である〕の民族心理学その他を経めぐったのち，共産主義者になったのです」とか，「カントの道徳哲学の高みからヘーゲルの歴史哲学とヘルバルトの民族心理学とをとおって，社会主義を自己の天職だと公言する確信に到達した」などと，[5] エンゲルスに告白することができたのか，全然理解することはできないであろう。

もっとも最近では東ドイツにおいても前述の批判とは異なった種類の評価が現われ，というより歴史上の人物の評価の仕方一般が変化してきたためか，ヘルバルト株も上昇中のようである。たとえば Günther Ulbricht は1961年の論文で，ヘルバルトは，手というものが人間を動物の優位に立たせた栄誉の地位を言葉と共に占めていることを指摘し，手労働の教育的意義（手労働を道徳教育および知的陶冶に利用しようとした）を明確にしたと，労働教育という，およそ今まで彼とは縁遠いものとされてきた視点から，彼を再評価し，しかしヘルバルトの思想の実践者たちによって，その労働教授が社会的生産現場から切り離され，労働者と何ら結びつくことなく行なわれたことを主要原因として，結局支配階級に奉仕することになったのだと言っている。[6]

また Ulbricht は，1967年にはヘルバルト主義者 W. Rein の矛盾した歴史的役割についての

---

(4) 原書『教育学史概説』は1952年発行。引用は青銅社版翻訳 p. 223, p. 228。なおヘルバルトのために一言弁護すれば，若干の厳しさをも持つ彼の「管理」の概念は，明確に「教育」自体と区別されており教育の準備のための単なる手段としての地位しか与えられていない。彼は「管理」を，威嚇・監視・権威・愛情に分類し，それぞれの欠点・限界も明示し，しかも強調は愛情の上に置いている。愛は疎遠で高踏的では得られず，かといって卑屈になりすぎても獲得できない。「もし愛が一たび獲得されたなら，管理はいかに容易になるだろう」「しかし愛は本来の教育にとってひじょうに重要なので――愛は生徒に教師の精神方向を伝えるから――愛を子供たちへの威力 Gewalt の自己満足の証明のために好んで，そして有害に利用するような人間は，最大の非難をうけるべきだ」という（'Allgemeine Pädagogik', "J. F. Herbart's Sämtliche Werke" hrsg, von Kehrbach und Flügel, 第2巻, S. 12。なお以下〔ヘルバルト〕全集はすべて同版を示す）。このような「管理」の概念には，たとえどんな悪用がなされたとしても，ヘルバルトの遺産自体としては，どこにも反動的な契機など存在しえない。

(5) A・ラブリオーラ『エンゲルスへの手紙』(1949)，『トリアッティ選集』(4) p. 25, p. 23 から引用。

(6) 'Über die Arbeitserziehung bei den Herbartianern' "Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte" 1961, Jg. 1.

べているが，そこでは「彼の師ヘルバルトと同じく，ラインはブルジョワ的社会倫理の信奉者であった」として，ヘルバルトは封建的な反ブルジョワ勢力の一人とする前述の東ドイツでの評価を180度転回させている。[7] この事情はソ連においても同様のようで，たとえばソ連教育科学アカデミー版の『教育科学辞典』（原書1960年）で完全に無視されたヘルバルトも，1967年の同アカデミー版『教育学原論』（コリョリョフ，グムルマン共編）では蘇生している。しかも「ブルジョワ・デモクラシーの教育学の発展」の項に。[8]

そこでわれわれもヘルバルト教育学とは政治的に一体何者だったのか，つまりその「静態面」を再評価し，そのあとでこの教育学と現実状況との立回りを，一・二の例で見て，一つの教育学が歴史上で果した実際的役割の検討への一助としたい。

2. 政治的態度

ヘルバルトは政治的無関心の人間であり，政治的諸事件に対してはあたかもマルマジロのごとく身を硬くし，象牙の塔に閉じこもっていた，かのように一般に誤解されてきたのには，それなりの理由があるにはある。まず何と言ってもあのゲッチンゲン7教授事件で彼が取った態度がその第一である。1837年，ハノーバー王エルンスト・アウグストが即位後すぐに議会を閉じ，1833年制定の憲法廃棄を断行し，全官吏に対して新秩序への宣誓を要求した時，グリム兄弟を含むゲッチンゲン大学の7教授が公けに抗議をして罷免され，うち3名が国外に追放された時，終始冷やかな眼で7教授の行動を眺め，この罷免を黙認した哲学部長がヘルバルトであった。しかも第二にすでに1813年に，この態度に対する理論的正当化の準備(？)もなされていた。すなわち彼は『哲学入門教科書』の中で，哲学者のとるべき態度について次のごとくのべていた。「思想家は哲学の結果を彼の固有の使用に供するだけに留めねばならず，決して直接に時代に働きかけてはならない。種々の哲学体系が相互に対立している限り，それは僭越である。そんなことをすれば，その結果，国家や教会は学問を恐れ，その自由な育成に制限を加え始めるのであ」り，時間的なものでなく，非時間的なものが，哲学者の本来の対象である，と。[1]

しかしながら渦中の代表的人物 Jakob Grimm（言語学者）の退職文書が「若者の率直な堕落

---

(7) 'Zur Marxismuskritik des Herbartianers Wilhelm Rein — ein Beitrag zur Auseinandersetzung mit der bürgerlichen Ideologie,' (6)の1967, Jg. 7. Ulbricht によれば，ラインは一方では教育学に対して疑う余地のない貢献をし，それに大学での地位も与え，また資本主義の弊害に対決して，そのヒューマニズム化にまじめに取り組んだのであったが，結局，真の社会諸関係とか，歴史の法則性を理解しえず，またマルクス主義の誤解のため，ドイツの大衆を資本主義の無慈悲な搾取と，帝国主義略奪戦争にひき渡したのだとされ，ある人間の学問的・政治的生活の役割は，一方的に黒白で決着がつかない，と主張されている。前述のヘルバルト批判とはその性質に大きな相違がある。

(8) 「ソビエト教育学界の二つの業績」その1，矢川徳光，『国民教育研究』48号，1968年12月。

(1) 'Lehrbuch zur Einleitung in die Philosophie (1813) の中の註，全集第4巻 S. 53。彼はこの註を，「まず第一に私的なものとして，次に彼の死後発表されることを，遺言として希望していた」（全集第11巻，S. 29 出版者序文）'Erinnerung an die Göttingische Katastrophe in Jahre 1837' の中で，「ひじょうに尊敬できる対立者」と彼自身がいう，7教授の一人 Jakob Grimm 批判と自己弁護のためにひきあいに出している。

していない心は，教師たちもまた，あらゆる場合において，重要な生活に関する，そして国家に関するすべての諸問題を，彼らの最も純粋な最も道義的な価値にまで還元し，そしてそうした諸問題に，まじめに真実性をもって答えることを要求する」とのべ，言語学の教師でさえ，たとえば「詩の傾向とか，言葉の最も内部的な構造に対して与えた，民族の自由なあるいは妨害された発展の，なまなましい影響を直接的に説明すべきなのだ」と主張するごとく[2]，学者というものは，すべて，時代的なこと，政治的事象に対して没交渉でいられるはずはない。ヘルバルトも，この二つの例のみから早まって判断すれば奇妙なことに，このグリムの主張と同一線上にある。なぜなら以下考察するごとく，彼の心理学，それを基礎とする社会論，教育論など，すべて政治上の事項に大きく関係しているからである。関係しているどころか，その衣の下に隠された論理の刃は，世襲制の王ののど元につきつけられ，時の支配者層にはなんとも言えぬ不気味な予言を投げつけているのである。

そしてまたわれわれは，ヘルバルトに関してゲッチンゲン事件を思い出す時には，同時に「コッツェブー暗殺事件」に対してとった彼の態度をも想起したい。ロシアのスパイとの専らの噂で，自分の著書を1817年のヴァルトブルク祭でブルシェンシャフトに焼かれたため，同祭典を罵倒した文を発表した，詩人コッツェブーが，1819年3月23日，ロシアへ逃走の途中，イエナの学生カール・ザントによって暗殺された。これをきっかけに，メッテルニヒ招集のカールスバート会議は，大学教育の監視，言論出版の自由の制限，煽動者の取締りに乗り出し，自由主義運動に壊滅的弾圧を加えて行くのであったが，ヘルバルト（当時ケニヒスベルク大学在職）はこの時，つまり1819年夏，既に非公開として予告していた実践哲学についての講議をわざわざ例外的に公開に切り換え，その中でこのきわめて政治的・時代的な殺人事件について触れた。

彼によれば，ナポレオンによる占領下においてさえもドイツの諸大学はどこでも，ひじように高い尊敬を享受し，その尊敬によって諸大学は権力の干渉から守られてきた。いかなるものも，諸大学の教授学習の古き自由を害するための口実など発見できるはずはなく，ナポレオンでさえ，大学に攻撃をかけることによってドイツ全体を刺激することを恐れたのである。ところが今や一つの事件が起った。誰が犯人か？　一人の学生である。どこに人は犯行の原因を求めるか？　現在大学を支配している精神の中に。人は誰の責任にするか？　大学の教師の責任に。そしてどの学部の中に誤った学説を求めるか？　哲学部の中に。かくて人は思想と教授の自由を告発することになったのであるが，それがなければ哲学はすぐに葬り去られるに違いないのだ，と当時の反動勢力の大学支配を非難し，「私はずっと以前から，私も私の学説もこの時代の精神に適していない，ということを知っている。しかし私は，私をこの精神に近づけ適合させるためにいかなる小さな手段をも利用しない」と[3]，外界の風にはなびかないとの哲学者の断固たる志操をのべてい

(2) 'Erinnerung an die Göttingische Katastrophe ...' の中でヘルバルトが引用している。全集第11巻，S. 42～3。

(3) 'Erste Vorlesung über die praktische Philosophie im Sommer 1819' 全集第5巻，S. 6。

る。しかも学生ザントに対しては，暗殺という手段は非としながらもその動機に対しては同情を示し，「(ザントの) 墓の彼岸では，彼のために新しい太陽が昇るにちがいない。まず第一に彼の誤りの夜を明るくするために，次に彼がまじめに探し求めたが，発見することができなかった，徳と健全さとの真の道を示すために[(4)]」と語っている。

当時，ブルシェンシャフトないしザントに対して同情的な大学教師への迫害は峻烈を極めていた。たとえば，ベルリン大学神学教授ド・ヴェットは，ザントの母親に手紙を書き，ヘルバルトと同様，息子の行為そのものは誤っているが，動機には同情できると述べて文部省によって首を切られるという状況であった。ヘルバルトがあの講演を公けの席上でなすには，相当の勇気が必要であったことは想像にかたくない。

こうして「学問の自由と学問の自由の説に対する政治的反動が，鋭く起れば起るほど，ヘルバルトはそれだけ大きく，そして男らしく声を張り上げた[(5)]」と言うのは若干オーバーに過ぎるかも知れないが，それでもそういう評価が生まれる側面を彼は持っていた。そしてヘルバルトは，今日では専門馬鹿の寄り集まりとして侮蔑の対象にされがちな「象牙の塔」に閉じこもるということも，本来より積極的な意義を持っていたのだということをも思い出させてくれる。政治的事象に対して決して背を向けるのではなく，それに対しては自分の任務のより本質的，ないし中核的部分として，自ら係わり合っていくが，それはあくまで一方通行的で，外界に実るより魅惑的な果実に手をのばすようなことはせず，そして学者の孤独性を守りながら，外からの干渉圧力に対しては，文字通りその硬固な牙をむいて抵抗する。ヘルバルトは一応そのような意味での「象牙の塔」の住人ではあった。しかしそれは結局，思想や主張の上の話で，直接的な行動の上でのことではなかった。現実に，露わに，自己が国家権力との対決の場にひきずり出された時，講義の中ではいかに勇ましい発言をしていても，結局はその対決を回避してしまうという，弱き講壇人の古典的（？）典型，それが彼でもあった。

3. 社　会　論

ヘルバルトの社会論について考察するためには，われわれはどうしても彼の心理学から入って行かねばならない。なぜなら彼によれば，「それぞれの社会全体の中においては，個々の人間は，社会的結合が相互の影響を完全に伝えるほど十分緊密である時には，ほとんど個々人の心の中の諸表象と同じように振舞う[(1)]」といわれる様に，社会論は心理学から演繹されているからである。ヘルバルトは夜空に輝く無数の星が，一見無造作に動いているかに見えながら，実は極めて厳密な規則に従って運行していることに感激しながら，彼は人間の心の中の動きにまで，合理的追求のメスを入れていったのであった。そして「人間の精神の合法則性は，星空のそれと完全に類似

(4) (3)の S. 4.
(5) 'Der Politische Herbart' Walter Asmus, "Pädagogischer Rundschau" 2巻8号, S. 349.
(1) 'Lehrbuch zur Psychologie' の第2版 (1834)。全集第4巻 S. 425.

している[2]」というまでに徹底した数学的心理学を形成したのである。

表象心理学とも呼ばれる彼の心理学によれば，人間は種々の刺激を受けた時，諸印象を感じる（感覚）のであるが，この感覚は刺激の消滅とともにすぐに消え去るものではなく，その後も残存して，つまり表象となってわれわれの精神生活の内容を形成する。そして感情とか意志などはすべて表象と別の独立した能力ではなく，表象からの派生物にすぎない。思考・判断・推理など人間精神の全活動は，この表象を使用して行なわれる。ゆえに，人間の心は推理力とか思考力・記憶力などそれぞれ別個の能力から形成されているから，たとえば記憶力は古典語文法の丸暗記で形式陶冶しようとする旧来の能力心理学を否定し，ここに人格のあらゆる面の教育はすべて諸表象を与えることから始まるとする，彼の教育論の基調が生まれる。

さて，表象は一度形成されると自己保存の傾向を持つが，人間の心の中が唯一つの表象だけで占有されているということはありえない。そこでは無数の表象がひしめき合っている。そしてこの表象の世界は，一定の力学法則が支配しているのであって，相対立した表象間はそれぞれの強さに従って相互に抑制しあい（hemmen），時には完全に相手の表象の量を消してしまう場合もある。つまりこの消された表象は識閾下，すなわち無意識の状態に陥るのである。しかしその質は不変であるから，あとになって再び一定の法則に従い，たとえばその表象と同一の，あるいは類似した，時には正反対の刺激を受けたりして力を得た時には，識閾の上に再登場することもある。他方，類似した表象間の場合には，一般的に言って結合し強化される。つまり同一連続線上の表象間の時で，完全に同一の場合，一層明瞭となり，完全に同一ではない場合，各表象の強度とその対立の度合に応じて結合し（Verschmelzung），同一連続線上でない表象間の時には，抑制はなく，全く結合して一つの力となる（Komplikation）。

このように種々の諸表象が絶えず抑制しあったり，統一しあったりしているのが，現実の人間の意識の姿なのである。したがってヘルバルトによれば，理解とか認識・学習などはすべて，旧表象群が新表象群を摂取同化すること（統覚作用 Apperzeption）によって行なわれるのであり[3]，教育とは心理学的にはこの統覚が行なわれやすいように諸条件を考慮して表象を与える仕事となるのである。

彼は，たとえば相対立する二つの表象 a，b が相互に抑制しあった結果，それぞれ両者に残存する強さの量を求める公式などについて書いている[4]。人の心をこのように扱かうこのあたりの機械的合理性には，開いた口がふさがらない感があるが，ヘルバルトはこの表象心理学を以下のごとく社会論に応用し，極めて特異な力を発揮させたのであった。

---

(2) (1)の第1版（1816）S. 373.

(3) 統覚作用の理論がフロイトに与えた影響について R. Ulich は次のようにのべている。「（統覚理論によって）ヘルバルトは学習と動機づけに関する現代の理論の基礎づけをしたのみならず」，……「彼はまた個人の行動における無意識の役割についての現代の仮説への道を拓いたのであった。フロイトは，彼の友人の一人が言うところによれば，ヘルバルトに負うところがあることを個人的には認めていたという」（History of Educational Thought, p. 276-7）。

(4) 'Psychologie als Wissenschaft' 1 (1824) 全集第5巻 S. 288.

さきの引用文から明らかなごとく，ヘルバルトは社会というものを，種々の諸表象から成立する心と類似化させて，種々の人間たちが自由に抑制しあったり結合しあったりして，一応のバランスがとれている状態と考えた。心という場のないところで表象が残存し活動できるはずがないように，人間は社会なしでは生きて行くことはできない。だから彼は「人間が社会の外に生存しうることはない。完全に個なる人間をわれわれは決して知らない」「そんな人間には人間性が欠けているだろう。さらにわれわれはまさしく陶冶された社会の中の人間しか知らない」[(5)]というのである。人間と社会との関係についてこのような基本的立場をとるヘルバルトの体系が，一般に個人主義的と噂され，ある時には批判されある時には称賛された主要な原因は，彼にはいかなるユートピア的社会，あるいは何かある外在的特定目的のための社会といった観点が全くなく，ゆえに彼は，個人があらゆる状態において従わねばならない，社会の中の何か高次のものの存在を，初めから完全に否定する点に存在している[(6)]，と指摘されうるのは，表象心理学から演繹された社会論のためである。

こうして人間の本性と社会形成の関係に関する3系譜，つまり自然的人間の本質を狂暴な闘争性と見て，「万人の万人に対する戦い」を回避するための社会とする，ホッブスに端を発する第一の流れ，人間は生得的に社会性を持つために必然的に社会は形成されるとする，プーフェンドルフや百科全書派などの第二の流れ，自然の人間の本質を孤立性・自立性に求め，種々の目的のために自由な同意による契約で社会を形成するとする，ルソー流の第三の流れ，この3系譜を適用すれば，ヘルバルトは明らかに第二の流れの中に立っている。つまり社会とは，作られるものではなく，できるものだ，というわけである。このような社会すべての核心 Seele ともいうべきものは，「その社会の目的を確定する共通意志」であり（この場合の社会の目的とは，第三の流れのそれが社会が形成される以前に社会の外に存在するのに対し，社会ができてからその内部に生じるものである），この共通意志を理解するためには，いかなる個人も一人だけではある目的を達することはできなくて，個人の私的意志実現の可能性は他人との協力いかんによることを想起すべきであるという。このことを喩えてヘルバルトは，「丁度一そうの船での航海を余儀なくされている多くの人たちが，誰も一人だけでその船の方向を勝手に変えることを思いつくことさえできないのと同じである」と説明している。そして「このような共通意志から〔社会の〕諸形式がひとりでに生じる」のであり[(7)]，また病気や死が遠い昔から現在に至るまで，人間の幸福を脅かしている以上，自然への従属は依然として続いているが，しかしそれは，どちらかといえば一

(5) 'Psychologie als Wissenschaft' 2 (1825) 全集第6巻，S. 16.

(6) "Pädagogik und philosophisches Denken bei J. Fr. Herbart" Artur Brückmann, S. 174。なお Brückmann はヘルバルトが個人主義的と噂された理由について「集団に反対する何か突出した個人主義の正当化が激しく強調されたとかではなく……」とも言っているが，ヘルバルトには以下で考察するごとく，その証拠が明らかにあると思うのでこの箇所を省いた。

(7) 以上 'Kurze Encyklopädie der philosophie (aus praktischen Gesichtspuncten entworfen)' (1831) の第11章，全集第9巻，S. 126.

層強い従属，つまり社会（諸形式）への従属によって，非常に柔らげられているという[8]。このように彼の社会とは個々人相互の関係の産物以上のものではないから，人間と社会との関係は非対立的で，社会が人間を疎外するといったものではない。

ところでヘルバルトによれば，「ある一つの土地の上で人間たちの諸力と諸利害が相互作用しあい，その結果バランスが得られるや否や，常に必然的に，奉仕者・自由人・名望家・支配者という4区別が生じる[9]」のであるが，ここでは自由人と非自由人がどのようにして区別されるかを見ておくだけにしておこう。抑制や結合などの相互作用の結果，社会的影響の閾下に落ちた人々は，自分の必要のために，彼らを雇ってくれるように他人に頼み始めねばならない。そこで彼らは，自分たちの労働をあてにする，特定の人間に従うことになる。今や共同体（抑制のあと融合したもの）が彼らの世話をひきうけない限り，彼らは彼らの主人としてのこの特定の人間に属することになる。彼らは，そうした人間たちによって，役に立つ所有物とみなされ，これに対しては逃げ去るという試み以外のいかなる手段も彼らは持っていず，おまけに，どこへ逃げたらよいのか知らない。こうして自由人と非自由人の関係が生じるという[10]。

さて，ヘルバルトの社会論の第一の特徴は，社会が人間の本性的性格によって自然に形成されるとする点であった。この社会は，ルソー流に必要な時には解散されうるという性質のものではないが，自己の目的は自分自身で決定するという原理を持っていたがゆえに，外在的目的，ないしより大なる社会への服従を拒否できることへの理論的根拠を提出していた。第二の特徴は，社会の中に存在する人間の区別は，それぞれの勢力の相互作用の結果自然的に生じた一応のバランスであるとする点である。この論理は当時の支配者層に一応の自己満足を与えておきながら，同時により根柢的な所では，二重の意味で彼らに痛烈なアッパー・カットを喰わせているのである。なぜならバランスは自然にとれるものであるから「よりよく結合すべき諸力を抑圧するのは，間違った政治に常なる誤謬[11]」となり，無理な強制や弾圧は使用すべきでないということ，次にたとえば今までバラバラで，しかも個々の強度が弱かったために，無意識下に落ちていた「赤」という表象が，何かの拍子に連想されたり，あるいは今まで全く意識のなかった所へ外から強力な「赤」の刺激が加えられたりすることによって，既存の表象圏の内容が変化しうるごとく，現在の社会的バランスも新しい勢力の抬頭によって，くずれうることを理論的に証明しているからであった[12]。フランス革命を経験した当時の支配者たちにとって，こんな気味の悪い社会論があった

---

(8) (7)の第2章，S. 47.

(9) (7)の第11章，S. 125。ここで奉仕者とは農奴とか奴隷のことではなく，広い意味では自由人であるが，その自由とは転職の自由とか，幸運的な恩恵を受けたりできる自由で，労働中の時間配分や仕事の種類を自己の判断で決定することはできないという（(7)の第6章，S. 86）から，今日的に言えばプロレタリア労働者というべきものである。

(10) (5)の S. 26.

(11) (5)の S. 31.

(12) この点，およびすぐあとでのべる，現実社会の活性社会への発展を志向するヘルバルト社会論から判断して，Karl Schrader が「ヘルバルトの形而上学は，自然や社会における発展への彼の理解をさえぎ

だろうか？

こうしてヘルバルトは，19世紀初頭の後進国ドイツという歴史的背景の中で，いわば自然的生成の社会論を展開することによって，時代の現実に対して大きくコミットしていた。

しかしながら彼は，現実社会を自然のバランスの結果だと規定することによって，人間はこの現実に対してはどうすることもできない，ただなるようにしかならない，という未来に対する諦観に陥ったのでは決してなかった。もしそうであったなら，人間と社会の改造を企図する彼の教育論は生まれることはできなかったであろう。現実社会の増長と干渉に歯止めをかませるために，まず自然的バランスの社会論を展開する必要があった。その上で彼は，この自然生成的社会をあらためて否定して，人間の手を社会に加えることを主張するのであった。これが彼の社会論の第三の特徴，活性社会（die beseelte Gesellschaft）論である。

ヘルバルトをして活性社会論を追求させるようになった最大の原因は，フランス革命中の血なまぐさい恐怖政治の嵐であっただろうと推察される。ルイ16世がギロチンで首をはねられた1793年，ヘルバルトは感受性豊かな，17歳のギムナジウム学生であった。そしてこの年彼は，卒業生に対してある祝辞演説を行なったのであるが，この中で彼は，せっかくフランス革命によって触発された情熱や，ヨーロッパの美しい明るい夜明けに，いかに恐怖政治の「図太い狂暴さ」が暗い影を落しているかを示そうとした。人間の社会はただ単に成り行きにまかすだけでは，道徳性の堕落を招くことになると身に浸みて感じたのであった。

「ヨーロッパの多くの地域は，既に美しい明るい夜明けを享受しており，教養の鼓舞的な光，つまり道徳性が暖まってきている。少なくとも好ましい夜明けの曙光が，まさにこの明るい日中を約束している。ただわれわれの大陸の一地方の上空にのみ，まさに今再び，新たに，恐ろしい暗雲が集中してきている」と，彼はラインの向う岸の悲しい光景を嘆きながら，この悲劇の原因を追求していくのである。あの革命は真に陶冶されていない，ただ感性のみのたかまりに刺激された人々によって遂行されたのではないか。「合理性を追求する衝動が，階級制度の鉄の鎖を断ち切ることを試み，そして正しい宗教的認識にまで達しようと努力したその時に，迷信と支配欲との，恐ろしくも極めて激しい狂暴さによってそれは追撃されてしまったのではないか？　ここに今人類が恐れおののいている全恐怖の根源がある[13]」と。このように判断して彼は，「道徳性の堕落」を予防するには，結局，すべて人間の中に多かれ少なかれ存在している道徳性を求める自然的衝動と関連させて（このあたりにはまだカントの影響が強くみられる），理性に合致した「意志の教養」を建設して，国民のよき道徳性を維持し，そしてあらゆる感性の活動，とりわけ「私利」と「党派心」を抑制することが必要だと思うようになった。そしてこのことは最終的に

っている。ヘルバルトにとっては，根本において，自然におけるいかなる真の生成も，より高次の社会形態への発展も存在しない」（Die Pädagogik Herbarts, “Pädagogik” 11巻8号，S. 566）と批判しているのには問題があると思う。

(13) ‘Etwas über die allgemeinsten Ursachen, welche in den Staaten das Wachstum und den Verfall der Moralität bewirken’ (1793)，全集第1巻，S. 358.

は，「少なからざる，一般的に普及された知性の教養が必要であり，しかもこの教養は，あらゆる高貴な技芸と学問が栄え，そして国民の陶冶のための結合された力と協力するのでなければ，恐らく実現は困難[14]」なのである。国民の真の知的陶冶。それによって若きヘルバルトは，ラインの彼岸で解放された欲望と情熱とを「図太い狂暴さ」に売り渡すことなく，正しく統御していこうとしたのである。こうした考えが，のちに活性社会の倫理学に結実していくのであるが，感情の先走りを誡める彼の教育論の萌芽が，すでにここに芽生えている。

さらにヘルバルトが，自然的生成の社会論を否定する動機を探せば，それは彼の肉体的弱さの中にあったかも知れない。幼児の時に熱湯の中に落ち，それ以後，視力は弱まり虚弱体質になったと言われる彼には，弱者に対する同情心があふれていた（理性主義の論理にこのような説明をつけるのは，ヘルバルトに対する侮辱かも知れないが）。「ただ強いものだけを賞賛し，愛し，尊敬し，ほめたたえる人たち，自分たちの判断力が衰えた時，抜け目なく強いものにくっつく人たち」が作り上げた身勝手な論理を批判しながら，ヘルバルトは，「権力の輝き，勝利の華麗さとかは，それが征服された者のみじめさと対比されれば，この光景は，人々の頭をしてそうした言葉が不当なナンセンスな破廉恥な主張だと気づかせる[15]」という。さらに次のような彼の論理の中に，われわれは，放任的社会に対する彼の態度を明確に読みとることができる。つまりフィヒテは『ドイツ国民に告ぐ』(1807～8) の中で，成人たちから切り離された青少年の愛国的集団教育を提案したのであるが，ヘルバルトはそれを批判して，そうした集団の内部では，彼らは互いに他に対する自己の強さを測定し，そしてあるものは打ち負かされ，他のものは主導権を握り，大多数のものは妥協して自己をまわりに適合させるようになるが，「そのような闘争は，よりよいものが勝利するという保証をこれっぽっちも持っていない[16]」といっている。

自然の社会ではより良いものが勝つとは限らない。だから彼はうかつに，「自然状態」を目標とはなしえなかった。ゆえに「市民的平等」も「決して自然の産物ではない」のであって，それは「常に意図と善意志あるいは技術でもって維持されねばならない[17]」ものであった。だからわれわれは理想的社会を意図的・作為的に形成しなければならない。そしてここにこそ彼において教育学が，大きなウエイトを占めて登場しなければならない必然性があった。

彼は理想的社会の姿を，権利社会・賞罰組織・行政組織・文化組織の実現されている活性社会として描いた。そしてその実現の手段として，以上の社会的諸理念が，それぞれ演繹されてきたところの権利・公平・好意・完全そして内的自由という5実践理念を，教育によって各個人の心の中に陶冶しようとしたのであった。ところでヘルバルトのいう活性社会とはいったいいかなる社会であろうか。その基礎となっている内的自由というのは，洞察（識見 Einsicht）と意志

(14) (13)の S. 354.
(15) 'Briefe über die Anwendung der Psychologie auf die Pädagogik' (1831—2) 全集第9巻，S. 346–7.
(16) (15)の S. 349.
(17) (5)の S. 27.

(Wille) が一致する状態を言うが，これを社会に適用して彼が説明するところを聞いてみよう。「法・公平・好意・完全の4理念をして適切な表現を得させようとする努力が，共通の関心事になっているところでは，共通の洞察に対する共通の従順さが存在し，ただ一つの心情のみを持っているように思える多くの人たちの内的自由が存在している。そしてそこでは，ある人が他の人の判断にただ従い，そして彼の良心に委ねられようとする，そのようなある人と他の人との分裂，この空しいそして死んだ対立は消滅する。結合されたものが活性社会を形成する[18]」。ヘルバルトは懸命に，いかなる人間も自分だけのものと感じたり，また自分とは関係ないと思ったりすることのない精神，自分たちのすべての中に，自分たちの総体の内に生きている魂のような精神を追い求めている。この精神の体現されている社会は，現実の社会の非人間性・無情性に対立し，自己の人格と内的に関係しあうような外的権威への自発的従順，つまり私と公との統一，社会正義と社会意志との一致が実現されているのである。ここには，共産主義社会との連続性が，もちろん観念の上だけであるが存在していると言える。

しかしヘルバルトが，強い者と弱い者とが生まれる社会的原因とか，現実社会の疎外性の原因を事実に即して究明することは全くせず，ただ心理的に説明するだけで，従って現実社会の弊害の救済をも，ただ個々人の人格の陶冶にのみ求めていった点には，彼のそして彼の時代のドイツ社会思想の大きな限界が存在していると言わざるを得ないのである。

4. 現実国家論

社会という概念は，とかく日本では，社会主義に通じる「社会」という言葉の抹殺現象とか，西欧的意味での市民社会の不完全性などの諸要因により，国家概念と意識的，あるいは無意識的に混同されてきた。しかしもちろんヘルバルトは，各所で国家と社会とを区別し，人間がまず第一に造り出すより小さな社会，つまり「家族・共同体・村落・都市・県などが国家から生じるのであり」「それらはたとえ国家形態が変化しても，それらの内的関係を維持するに違いない[1]」と，さらにまた「(国家の) 目的は先に存在する多様な社会によって与えられる[2]」と，社会の国家に対する先行性・(相対的) 独立性を指摘している。ところが彼においては，社会と国家との間に厳密な質的相違が存在しているわけではなく，両者は連続的に把握されている。つまり国家は，現存する社会のうちで最も強固なものだというわけである。彼が言うには「国家という言葉は，人間の相互的状況の確固とした状態を示している」「国家はバランスであり，動揺の反対[3]」である。種々の社会が集まって行って，自然的に国家を形成するのであるから，国家の形成は「下降的」ではなく「上昇的」だとも彼は主張する。

---

(18) 'Allgemeine practische Philosophie' (1808) 全集第2巻，S. 387.
(1) 'Über die Unmöglichkeit, persönliches Vertrauen im Staate durch künstliche Formen entbehrlich zu machen' (1831～2)，全集第9巻，S. 5-6..
(2) 'Kurze Encyklopädie der Philosophie...' 第11章，全集第9巻，S. 127.
(3) 'Psychologie als Wissenschaft' 2，全集第6巻，S. 25.

ゆえに，まず物質一般が存在し，それから固体や液体が生じるかのように考えて，まず「国家をいわゆる一般意志から構成し，それから権力を国家の中に植え込み，その上に法律を与え，同様に法律から種々の階級を生み，その階級からこのように考案された国家を現実化するために必要な人間を生み出すかのような」[(4)]国家学は（一般に「国家」とはまさにそのようなものであるが），逆だちしていると，彼は批判するのである。このようなヘルバルトが，ルソーなどの服従契約国家説に賛成できるはずがない。ヘルバルトは，とかく道徳的には問題の多かったルソーを，「ルソーは彼の人格に対しては弁解できるかも知れないが，その学説に対してはいかなる根拠ある弁明も不可能」であると皮肉たっぷりに批判しているが，その理由は「もし人が国家を会社のように考えて，それは最大の共通の利益をねらうもので，そしてもしそれより大きな利益が獲得できる他の希望がみつかれば，すぐに随意に解散できるものだ，などと思えば，それは国家の真の本性を逆立ちさせるものだ」からだという。そしてこの批判をいぶかるものは，フランスがかつて，単なるブルジョワ的契約の栄誉を説明するには，あまりにもその誤りを行ないすぎたことを思い出すことが必要だといっている。[(5)]

ヘルバルトが既述のごとく，少年時代に経験した恐怖政治のことを思い出して，国家解体を恐怖するには，ある程度理由が認められるが，しかし現代のわれわれが国家契約説から学んだことは，人は確かに契約によって国家を形成したのではないが，国家はまさに人間がある利益のために意図的に構築したものであり，そのゆえに，他のより高次の，より大きな利益のためには，それを人間の手で解体することができるということであった。

社会のみでなく，国家も自然的に形成されたものとするヘルバルトの上昇的国家学こそ，現代においては，国家の非超克性・非解体性，それに伴なう国家存在への諦観と全面的依存感を醸成し，また事実にも反して〝反革命性〟を帯びるのであるが，19世紀前半のドイツという歴史的時点では，後述するごとく社会の国家に対する根本性を主張し，それに伴って国家による教育の独占を阻止する（つまり教育に対する社会の優位性を確保する）という進歩性をも持つものであった。だからこそヘルバルトは，5個の社会理念についてのべながら，「すべての国家が活性社会となることは望ましい。しかしそのことはここでは私たちに関係がない。国家を特徴づけるものは，その強制的強力である。理念は強力とは無関係である。上述された社会的理念が国家と混同されることを防止することは極めて重要である。なぜならこの諸理念は，ただ単に大きな人間集団に妥当するのみではなく，またすべてのより小さな，そして最も小さな結びつきにまで妥当するからである」[(6)]と言えたのであった。

さらにまたこうした国家観は国家の存在を相対化し，ヘルバルトは絶対主義の擁護者との，後代の非難にもかかわらず，その〝絶対主義化〟を阻止するのであった。なぜなら彼においては，

---

(4) (1)の S. 6.
(5) (1)の S. 10.
(6) "Allgemeine practische Philosophie' 全集第2巻，S. 387.

社会と国家とは連続したがゆえに，社会のバランスがいつ崩れるか解らないという原則は，そのまま国家にもあてはまるのであり，諸社会の諸力のバランス追求の産物として生じる諸制度・諸形式（国家はその最大最強のもの）は，その時々の現実諸力関係の表現であり，決して固有の本質などではなかったからであった。これが「人間の精神も国家も，起源的に特定の有機的胚芽の性質など持ってはいない。もしそんなものがあれば，教育技術も政治技術も一種の庭師的技術に変化してしまい，ただその胚芽に発達する機会を与えるだけで，その胚芽を改造することはできなくなってしまう[7]」と，庭師的教育論・政治論が拒否され，人間と国家の改造を暗示できる根拠であり，「ヘルバルトにとっては，いかなる絶対的な，それ自体正しい国家などあり得ない[8]」と説明されるゆえんであった。

以上のべてきた所からわれわれは，ヘルバルトの，観念論ないしヘーゲルとの決定的な訣別を認めることができる。1897年のある講演の中で，A・ラブリオーラが次のようにヘルバルトの体系を特徴づけることのできた理由も，われわれは納得することができる。「わたしは，生涯の幸運な偶然によって，今後われわれが古典的と呼ぶことのできる哲学全体の終点になっていた二つの偉大な体系，つまりヘルバルトおよびヘーゲルの体系の直接の真正な影響のもとで自分を教育してきた。この二つの体系において，実在論と観念論，多元論と一元論，科学的心理学と精神現象学，もろもろの方法を特殊化することと全知な弁証法においてあらゆる方法を先取りすることとの対立がぎりぎりの帰結に到達していたのであった[9]」と。

その後継者たちの中から，民族心理学の創設と発展に貢献した3人の学者，つまり Waitz, Lazarus, Steinthal を生んだヘルバルトは，また，社会とか国家の形成・存続に心理学の光を当てて説明を試みた，集団心理学建設のパイオニアでもある。国家というものは，人々が自己の保護を求めるなかで，心理的に形成されていくものである。そして国家がその上に基礎をおいている，奉仕者・自由人・名望家・支配者の区別は，心理的メカニズムの中に深く存在しているので，除去することはできないが，ただ道徳と啓蒙とが誤った区別の根源である人間の反抗心，そして諸錯覚を是正していくことによって，次第に緩和することはできる，とされる[10]。彼はまた，心理学はさらに「外見の領域には一種の錯視が生じ，それによって区別は一層拡大され，またこのことによって大きな利益が，たいていの名望家のものとなり」「そして勢力を獲得することが大変容易になることを示してくれる[11]」と，国家や社会の階級の心理的形成に，人々の錯覚が果す役割の大きいことを主張するのであった。

---

(7) (3)の S. 34–5.

(8) "Pädagogik und philosophisches Denken bei J. Fr. Herbart" Artur Brückmann S. 177.

(9) 『大学と学問の自由』(1897)，『トリアッティ選集』4, p. 24 から引用。なおトリアッティは，ラブリオーラがヘルバルトに接近した理由について，ヘーゲル主義のあれこれの部分をのりこえたり，訂正したりするのではなくて，ヘーゲル主義全体を克服し，マルクスとエンゲルスとが，ヘーゲル体系の転倒と呼んでいたあの作業をなしとげようとするためだったとしている（同上書，p. 22)。

(10) 'Kurze Encyklopädie der Philosophie...' 第11章，全集第9巻，S. 135–6.

(11) (10)の第6章，S. 87.

こうした主張は今日的にもひじょうに大きな意義を持っている。国家というものは，階級分裂に基づく被支配階級抑圧のための暴力装置という「政治的機能」とともに，明らかに国民の共通利害を守るための「社会的機能」ともいうべき機能を果し，しかも「どこでも政治的支配の基礎には社会的な職務活動があ」り，「また政治的支配は，実際，自己のこの社会的な職務活動をはたした場合にのみ，長く続いた」[12]とのべられるように，この社会的機能が国家へのいわゆる「幻想」を生む根拠となり，国家の成立・存続にとって不可欠的に重要であるからには，われわれは特殊状況下を前提にして生まれた『国家と革命』流の，国家＝暴力装置論一本槍で国家を切ることはできない。この点においてヘルバルト国家論は，もちろん「政治的機能」を欠いたまがいものではあるが，しかし種々の錯覚も手伝って人々は，自己を保護してくれるはずの国家を心理的に形成しそれを支持するとの彼の論は，国家によって虐げられ疎外された人民が，自己の救済と保護をかえってその国家に期待し，またその不満のはけ口を国家権力の対外的・対内的行使の中に求めるという，「幻想共同体」国家現実のダイナミックスの深層心理的分析への糸口を提出しているといえるのである。

ところでヘルバルトは，人間の精神と同じく国家というものはア・プリオリに定められた，改変することのできない固有の特性など持ってはいないという意味で，有機体では決してありえないと言った。しかしその機能の面では両者はひじょうに似ている。いやむしろ精神と同様に国家は「次第にそして永久に一定の有機体に接近しつづけるが，しかし決して完全には到達はしない」[13]と考えていた。だから彼の国家論は，条件つきではあるが，一種の国家有機体論である。国家有機体論は周知のごとく二重の刃であった。つまりそれは，全体ないし「中枢神経」を，各部分・各器官に優先させれば，下部組織の自由を認めぬ，弾圧専制のイデオロギーになる。しかし他方，部分や各器官に強調をおき，全体はそれら小部分の個性ある役割によって初めて完全な生存活動を行なうことができると，個性尊重，かつ各部分に価値差別を加えぬ役割分担の思想にもなりうる。「われわれの時代は，有機体においては全体が部分を先導するという虚構に完全に惚れ込んでしまった」[14]と嘆くヘルバルトは，もちろん後者の意味での国家有機体論者であった[15]。

生産労働における分業の形式が発見された時，人々はそれをいかなる大きな仕事も容易に可能にする魔法の杖のごとく思い感激したことであろう。しかしフーリエやオーエンはすでに，分業のもつ労働者および労働活動そのものの畸形化作用についてはっきりと認識していた。ところが後進国に生きるヘルバルトは，この分業形式に対する感激からまだ解放されていず，それに対す

---

(12) エンゲルス『反デューリング論』（下）岩波文庫版，p. 60。

(13) 'Über einige Beziehungen zwischen Psychologie und Staatswissenschaft'（1821）全集第5巻，S. 35.

(14) 'Psychologie als Wissenschaft' 2，全集第6巻，S. 34.

(15) 「有機体の中においては多くの組織が，確かに一つの共通の生命のために相互に扶助しあうが，しかしそれぞれの組織は，まず第一に固有の力を持ち，自己独自の理解に従って存在する」（'Allgemeine practische Philosophie' 全集第2巻，S. 407.

る大きな希望的幻想を抱いていたのである。彼は生物体の構造の中に完全な形の分業形態を発見し，それを国家内部の分業と重ね合せた。心臓のない動物に次第に心臓や肺が生じ，少数の神経節しかない動物に徐々に脊椎や脳ができていったように，「栄えて行く国家においては，諸階級がますます分化して行き，国家は，自己の行動の領域が一層せまく限定されていく成員たちを持つようになる[16]」というのである。こうして彼はひたすらブルジョワ教育理念の確立に奉仕した。

それでもさすがに先見の明あるヘルバルトは，他方では成員の活動の限定性からくる国民意識の分裂を，後述するごとく各成員に対する多面的興味の陶冶によって克服しようとしたのではあったけれども，有機体的国家論の矛盾から逃れることはできなかった。つまり有機体の各組織には普通できない芸当，すなわち役割の兼任と交代とを，国家・社会の中の人間はできるということ，そしてこのことによって人間は，各個の限定性を克服できるということを忘れてしまった，いや思いつくことさえできなくなったのである。有機体的国家論という二重の刃は，結局どちらの刃を使っても，個人の一面性を固定化し，人間の統一的人格を深く傷つけるものであった。

それでも彼は，人間は自己の発達過程の中で，つまり後天的に，しかもたえず「組織化されつづける」国家の発展プロセスの中で，自己の所属すべき自己に適した組織を発見していく，との有機体的国家論でもって，この世に生まれ落ちた時から既に社会や国家の中での自分の地位が決定されている封建的な世界からの人間の解放を遂行しようとしていたのであった。

5. 理想国家論

さてヘルバルトが，国家内における人間の信頼ということ（相互間の，さらに支配者に対する）を強調するのは，このような有機体的国家論に帰因している。なぜなら有機体においては各成員は，それぞれが相互に依存しあっていることを理解し，相互に信頼しあっていなければ統一的な行動はとれないからである。しかしわれわれはここで重要な確認をしておかねばならない。そうしなければ，ヘルバルトは当時の領邦専制国家のゴマスリ御用学者だとの誤解がまたまた浮び上る危険性があるからである。確認とは，信頼の必要は国家が有機体的存在であるからであったが，しかし既に考察したごとく，有機体的国家とは絶えず発展して有機体に接近するが決して到達はしえない，という一つの理想であったことである。従って現実の国家は決して完全な有機体ではない，つまりヘルバルトにとっての理想国ではなかった。もちろん彼は，自分の説の中で現実国家と理念国家の区別をきちんとしているわけではない。しかしわれわれは「国家とは」という一般的な形で，あえて現実と理念とを混同させてのべねばならなかった当時の社会的背景を考慮してやる必要がある。

かくてヘルバルトの「国家」においては，ただ国民の信頼のみが必要とされ，国民の直接的政治活動や人工的諸制度は，不必要なもの，少なくとも第二次的なものとなる。彼は次のように言

---

(16) (13)の S. 36.

っている。「国家において人格的信頼が欠如している時，人工的諸制度がその補完をすることが可能かどうか？　決定的確信を持って私は答える，ノーと。むしろ反対に諸制度があまり完備されない時には，人格的信頼がそれを補なうことはできる[1]」と。国家の階段を上へ登れば登るほど，われわれの信頼がどこかでなくなり，そして多分どこかで，その欠けている信頼を補なうための代用品が役に立つなどと考えることは，ますますできなくなるのである。この人格的信頼の代替不可能性を彼は，初期の合理主義者がよく使う手，社会科学現象と自然科学現象との対比によって次のように説明している。

既に私の青年時代から化学者たちは人造血液製造のためのあらゆる種類の試みをしてきた。だがそんなことができるだろうか？　血液とは何かまだ十分知られていないが，しかし個々の生物体は血液の固有の種類に属していて，いかなる類の動物も，非常な危険を冒さないことには，他からの輸血に耐えることはできないことは知られている。ゆえにたとえ人造血液が完成したとしても，それは人造動物にしか適用できないだろう。現実に生きている動物にはそれは毒物となるであろう。「人間が自分たちの間で結ぶ，現実の生きた，まさに今存在している信頼関係を考慮することなく，単なる理論の結果として人工的制度をそれに与えることができるような国家とか国民が一体どこに存在しえるだろうか？[2]」と。国家の内の階段を上に登れば登るほど，人工的諸制度だけをカスガイにして，あるいはそれに縛られて生きているわれわれにとって，ヘルバルトのこの言葉は明らかに一つの衝撃である。

このように彼をして，国民の国家への信頼の重要性を繰り返させ，契約国家説に反対させ，「君主制形態の必要性が，しばしば共和主義追求の努力のどまん中においてさえ，非常に切迫して現われ決定的に有力になる[3]」などと言わしめたのは，直接的には彼の有機体的国家論であり，間接的にはフランス革命のテロリズムであった。そして彼はいわゆる主権在民という民主政体は，結局私的エゴ（個人的，社会的）の対立抗争の場であり，君主政体こそ社会諸力のバランスが得られやすいと考えた。契約国家の中では（そこでは個々の国民はただ任意の統合つまり契約の結果としてのみ結合されている），個々人はこの契約への自分の関与があまりに小さいのを発見し，その結果公けへの興味を失ってただ私的利益の追求にのみ努力することになる。「（自分の参加する契約ということで）夢に描いた可能的利益の合計の方が，現実に達成できる利益の合計をずっと上まわっている。そのような状況の下で，少数の抜け目のないそして幸運な投機屋どもが，赤裸々な財と権力を獲得するのである。不平等はそれが変身し，仮面をかぶることによって成長する[4]」という。

---

(1) 'Über die Unmöglichkeit, persönliches Vertrauen im Staate durch künstliche Formen entbehrlich zu machen' (1831～2) 全集第9巻，S. 7.

(2) (1)の S. 5。なお Karl Landsteiner が血球凝集反応を発見し，輸血後の危険症状のナゾを解明したのは1901年のことである。

(3) (1)の S. 13.

(4) (1)の S. 14.

このように批判するヘルバルトは，大衆の意志があたかもそこから生まれたかのような錯視を生み，ゆえに大衆自身が諸政策の害の責任をとらされるという，契約国家論ないし議会制民主主義の別の顔を批判するための〝反面教師〟とでも言えるだろう。しかし結局彼は反面教師にとどまらざるをえず，国民の直接的政治行為に着目できず，ひたすら全国民の心情を国家への信頼へと一元化するほかなかったのは，またしても彼の採用した有機体的国家論の帰結のためであった。つまり彼は，それぞれ自己の職業を持つ国民も同時に直接的に政治活動に携わることができるという事実に盲目となっていたためであった。

しかし彼が君主制への信頼を要求したとしても，彼の国家論からして強制的な専制政治を支持しているのでは決してない。「長期にわたる汚点のない，福祉的な支配」[(5)]がまず前提され，それがあってこそ信頼は獲得されるのであり，強制は「支配の信頼性を捨て去り，国家の中の総てが頼り，固執すべき確かな点を消滅させてしまう」[(6)]のである。信頼された模範的国家では国民の諸願望がまず表明され，それに次いで質問が続き，そして報告が要求され，それが実行され，重大な質問には公開で解答が与えられる。そして「あらゆる寄せられた解答の集まりの中から必要性の知識が，つまり自然的および道徳的な真の生活必要性の知識が生じる」が，しかし「きままな望みとかわがままな要求」は注意深くこれらと区別されねばならないのである[(7)]。またヘルバルトは官僚の独裁をいましめて「役人とは普通，求められたことにのみ回答を与えるものである。ただ非常に切迫した困窮時のみが，しかも援助することが遅すぎるくらいの困窮時のみが，役人たちをして求められないことをも，しかるべく行なわさせるのである」[(8)]とのべている。ヘルバルトの時代の役人も現代と同じく，国民の生命・生活にさしせまって必要でなく，求められないことにばかり異常な興味を示し，かんじんの求められた「真の必要性」には全く無関心，ないしは生命の多くが現実に失なわれ多くの生活が破壊されるようになって初めて後手々々に回答を与えるものだったのである。

このように考察してくると，ヘルバルトはカントがそれこそ最大の専制政治と呼んだ「パターナリズム（家父長慈恵的）政治」の擁護者のように思えてくるが，しかし彼の言う君主とは，パターナリズムの伝統的な世襲制の王とはその根本において全く異なるものであった。君主制度が主張されあるいは残存しているからといって必ずしもそれが封建的ないし絶対主義的と言えないが，われわれもこの点について触れておかねば，ヘルバルトの〝恐ろしい〟功績を正しく評価することはできない。カントの『純粋理性批判』が，観念の世界で「超越神の首を切った剣」[(9)]であるとすれば，ヘルバルトの表象心理学は，不合理な世襲制君主の偶像を，その内面から打ち砕い

(5) (1)の S. 4
(6) (1)の S. 8。「模範的国家というものは一度でも権力に対する恐怖の念が印象づけられた所では，決して栄えることはできない」（同上，S. 12）。
(7) (1)の S. 7.
(8) (1)の S. 9.
(9) ハイネ『ドイツ古典哲学の本質』（岩波文庫）p. 140 .

た鉄槌である。なぜならすでに考察したごとく，人間の知識・感情・諸能力を含む全パーソナリティは，人間の成長のプロセスの中で経験と交際（それらの補完をするのが教授）を通じての諸表象の獲得によって後天的に形成されるからであり，従って生まれたての赤ン坊の中に，将来君主になる胚芽など断じて存在しえぬからであった。だからこそここに人間の教育の可能性が存在しているのであり，ヘルバルトが「教育（学）の根本概念は生徒の陶冶性である[10]」というあの有名な，教育者に対する至上のテーゼを主張することができたのであった。

従ってヘルバルトが「支配者の系統は，何百年も栄養を与えられ試験され，そして確立される樹木のように立たねばならない[11]」と言う時，この系統は例えば何々家といった一血族の意に誤解されやすいが，そうではなく支配者の類としての系統であると理解しなければならない。世襲制の王の適格性が「試験（prüfen）される」なんてことはありえない。

彼が描いているのは明らかに一種の哲人王である。厳しい訓練の中から養成される実際に行動する王である。だから「外国人」が言うところの「不正を行ないえない」王などではないという。なぜなら「外国人」たちはそういいうるために，「その王の手足を縛り，王に全く行動させないことを最も好む」からである。しかもヘルバルトの支配者は，その社会論に従って，前もって存在し大衆を平定支配するのではなく，社会諸力のバランスが得られた時に初めて必要となるのであった[12]。

結局ヘルバルトの理想はプラトン的共和国であった。プラトンが彼の師ソクラテスを殺したアテネ民主主義の弊害と，スパルタ的全体主義の危険性という二つの欠陥を，彼固有の国家論と教育論で克服しようとしたごとく，ヘルバルトはフランス革命の「図太い狂暴さ」とドイツ領邦国家の弊との克服を，彼の活性社会論と教育論に求めたのであった[13]。「いかに長い世紀に渡って，空中楼閣を特色づけるためにプラトンの共和国のことが，まるで諺のように利用されていることか？　しかし事実はそれこそまさしく活性社会の理念以外の何ものでもないのであって，この共和国こそ，プラトンによって伝えられた普遍的輪郭が正当に実現される時には，まさにわれわれが権利社会，賞罰・行政・文化の各システムと，4名称で言及したところのものを，それ自体で完成するものなのである[14]」。このような共和国や君主を理想として心に抱いていたことが，ヘル

---

(10) 'Umriß pädagogischer Vorlesungen'（1835）の冒頭の言葉。全集第10巻，S. 69.

(11) (1)の S. 7。彼はまた『一般教育学』の中で，「世界は少数の人間に依存していて，少数の至当に陶冶された者が世界を正しく導くことができる」（全集第2巻，S. 16）とも言っている。つまり真に陶冶されたものしか国家という有機体の頭脳にはなれぬというのである。

(12) 'Kurze Encyklopädie der Philosophie...' 第11章，全集第9巻，S. 127.

(13) ヘルバルトは心理学と国家学の結合など多くの点をプラトンから学んでいるが，両者の間には多くの相違点もある。教育論に限って若干の例をあげてみると，ヘルバルトはまず，プラトンが支配者の教育にばかり注目し国民教育について語らないと批判し，教育内容としてホーマーの詩を絶賛し，方法論として庭師術を否定，また家庭内での教育を第一に重視するのに対して，プラトンは，善や悪を行ない泣いたり悲しんだり恐れたりする人間的神を描くホーマーを排斥し，知識は想起するのみとの産婆術をその師からひきつぎ，理想の教育は家庭から分離したスパルタ的方法をとるべきと主張する。

(14) (12)の第6章，S. 90.

バルトが代議制非難を次のように行ない，ただ王への信頼を説く理由でもあった。一人の大臣や代議士を舌と筆とで排除したあとにその代りに別の大臣・代議士を選び，さらにまた選挙形態を非難したりするそのような国民は，確かに代表されはするが，不信に出発して不信に終り，自分のための警察を作っておきながらその第一の警察に裏切られないように第二の警察を持つ，そのような王に似ていると。(15)

さて以上のように人間の精神と同じく，決定的でなく流動的であり，絶対的でなく相対的であるヘルバルトの有機体的国家の中においても，「全表象のシステムから，新しく加わる諸表象およびそれから生じる感情・欲望のための一定の同化様式が生じるが，しかしすべての同化は同時に，その同化の主体そのものをも変えてしまう。そしてそのことによって将来の同化に新しい方向を与えるのであり，ここに教育の可能性が基づいている(16)」のであって，かくて人間の精神に対する教育可能性と共に，常に〝国家が教育する〟ということを恐れてビクビクしているわれわれに向って，まさに主語が目的語にひっくり返されて，国家に対する教育可能性，つまり〝国家を教育する〟という，ヘルバルト教育学の文字通り革命的な〝極秘指令〟が明らかとなってくるのである。そしてこの〝極秘指令〟はやく半世紀後の1875年にもなれば，マルクスによってより具体的にそして一層理論的に武装されて，「それどころか，プロシア＝ドイツ帝国では……反対に，国家が国民からはなはだ手あらな教育を与えられる必要がある」（ゴータ綱領批判）と，〝公開指令〟となって現われるのであった。

6. 教　育　論

では国家を教育するにはどうすればよいか。それは個人の心を教育する場合に，その構成要素たる諸表象に何らかの刺激を加えて，表象圏の組み変えをすると同様，国家の構成要素たる個々人の組み変えを行なうのである。どういう具合に組み変えるか。ヘルバルトの場合もちろん，彼の理想とする活性社会ないし有機体的国家へとである。したがってプラトンの国家学が同時に教育学であったように，ヘルバルトにおいても「政治技術は教育技術と堂々めぐりする(1)」のであって，どこまでが政治でどこまでが教育か区別がつかない。活性社会建設のためには権利社会，賞罰・行政・文化組織の4理念が実現されねばならないが，そのためには各個人を内的自由・完全・好意・公平・権利の5理念で陶冶しなければならなかった。

このように陶冶された個人の人間像を描いてみると，少なくとも次の3特徴が浮び上ってくる。つまり国家という有機体の成員としての個人は，第一に自立し独立した存在であって，全体ない

(15) (1)の S. 12。結局われわれの意志は代表などされ得ない。ゆえにたとえ「民主的」な代表者のみの国家ができたとしても，それはまた新種のパターナリズムになる可能性があり，なお国民の直接的政治行動が必要とされるゆえんである。

(16) 'Über einige Beziehungen zwischen Psychologie und Staatswissenschaft' (1821) 全集第5巻，S. 35.

(1) 'Kurze Encyklopädie der Philosophie...' 第11章，全集第9巻，S. 136.

し上部組織に強制されるのでなく独自の判断で行動する。第二に彼は，彼特有の個性を持って有機体の全活動の一部を分担し，従ってその活動領域は限定されている。しかし第三に，精神においては各個人は，他の個人の活動領域への理解を示しながら，有機体全体がバラバラになることを防ぎ全体の統一性を守るのである。

このようにヘルバルトは，自己の理想とする来るべきドイツの市民社会，その市民の姿を提示し，封建的臣民像からの解放を夢見るのであった。その際，経験と交際だけに頼っていたのでは古きものの影響が強すぎてこの解放作業ははかどらない。ここに経験と交際を補完すべき教授の必要性が生じ，この教授が偏見を打破するためにカビ臭い表象圏の内部にまで深く係わってその再構成に努力するはずなのであった。こうして彼の教育目的論・方法論は，当然のことながら前述の理想的個人の3特色と密接に関係してくるのである。

まず第一の特色である自分で思考し判断する人間，これこそヘルバルト教育目的論の最大の眼目であった。彼によれば「陶冶された人間とは，絶えず自己の思想の建築に従事している[(2)]」人のことであり，しかも「思想圏は，環境の都合の悪いものを克服し，その好都合のものを自己の内に溶かし込み，自己と結合させる力を持っている[(3)]」と言われるごとく，彼の教育学では思想圏は積極的建設的性格を持っているのである。だから彼が，考えるということを放棄してただ記憶しておくことのみを重視する〝つめ込み主義〟の代表だというのは完全な中傷である[(4)]。また『美的表現』の中で「手あたりしだいの命令に対するあらゆる服従が道徳的なのではない」「服従する者が命令を吟味し，選択し，その価値を認めたのでなければならない」「道徳的なる人間は自分自身に命令する[(5)]」と，彼が主張している点は，有機体の成員は一方的に全体に服従するのではなく，信頼するに足る条件がそろった時に初めて自発的に服従するとの，彼の有機体的国家論に関係している。

このような個人は孤独な存在である。中枢神経の命令に従っている方が，ある意味では楽であり安定しており連帯感を持つこともできたからである。ヘルバルトによれば「真の人間理解の第一条件は……恐怖や希望，えこひいきや嫌悪から解放された，静かな偏見のない観察である[(6)]」が，このことは彼自身も認めるごとく極めてむづかしい。しかしこの第一条件があらゆる政治的党派

---

(2) 'Allgemeine Pädagogik' (1806) 全集第2巻，S. 62.

(3) (2)の S. 16.

(4) 彼は『一般教育学』の中で，数学全体，人類発展の全遺産，さらに九九表，単語，文法などが総合的教授の内容だとのべているが，この時われわれが注意しなければならない点としたのは何であったか。それは「誤った取扱いによって（これらの内容の）いかに多くのことが，メチャクチャにされるか」ということ，つまり「もしこれらの諸要素が単なる暗記によってうむを言わせずつめ込まれねばならないなら，生徒たちは総合的教授のあらゆる拡大に対して抗議するに十分な理由を持つことになる」ということだった（全集第2巻，S. 61）。

(5) 'Über die ästhetische Darstellung der Welt, als das Hauptgeschäft der Erziehung' (1804) 全集第2巻，S. 262.

(6) 'Über Menschenkenntniß, in ihrem Verhältnis zu den politischen Meinungen' (1821) 全集第5巻，S. 15.

に欠けている時には，人間理解の高度の諸条件である，鋭利な区別や完全な総括の実現は望めないのである。そして偏見と先入観にとらわれたそのような党派は，他者の人間的感情の中に自分を置いてみることなど全くできず，自分だけに固有な支配的感情を，状況の判断なしに，他人にも押しつけるようになるのである[7]。かくて「人間理解はあらゆる政治的誇張の当然の敵[8]」となるのであり，ここにヘルバルトが，このような危険性に陥りやすいという意味で党派への所属ということを特に嫌った理由があり，あえて自分で思考判断する孤独な個人を選んだ根拠があった。ルソーの社会論とヘルバルトのそれとの相違は，前者が自然状態での人間の本性を孤立的としたのに対し，後者は社交的であるとする点にあった。ルソーが人間の孤独性を出発点にするのに対しヘルバルトはそれを到達点としたのである。ヘルバルトには社交性とは妥協性と映ったのである。しかしヘルバルトもただ孤立性のみを目的としたのではないのであって，彼の目的も結局，人間つまり自然人を作ることと，市民つまり社会人を作ることとの統一を追求したルソーのそれと大きな差はないのである。

第二に彼の教育学は個人性尊重の教育学であった。エミールの教師が「お前のとび越した溝はあれだ，お前の持ち上げた重さはこれだ。お前はこれだけの遠さまで小石を投げることができた。さあ今度はどれだけ余計にできるかやってごらん」という風に導くように，ヘルバルトも「教師は自分の生徒を他の生徒と比べたりせず，その生徒自身と比べる[9]」べきだ，つまり生徒の評価は〔たとえば他人との比較による5段階評価などすべきでなく〕生徒の過去の能力と現在のそれとの比較によってしかしてはならぬと主張するのも，生徒は自分だけの，他人と比べたりすることのできない固有の人格を持っているからであった。また彼が，全国画一の教案などを「もっともくだらない教案」と一蹴するのも[10]，それが個々の生徒の個人性を無視するからであった。

生徒の個人性というものを尊重するためにヘルバルトは，一方では生徒の思想圏を通ることなく直接的・感情的に心情をゆさぶる教育方法を拒否すると共に（8，〔の注3〕参照），他方では家庭における教育を方法論の原点に据えた。したがって彼は多くの箇所で集団教育と，それに関係深い公教育・学校教育を批判しているが，なかんずく彼の眼の敵としたのは，フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』の方法論であった。すでに触れたごとく，フィヒテはその中で彼の新教育なるものを提案したが，そこでは「生徒たちは成人たちの俗悪さから切り離され，彼ら自身の間で社会生活を営み，そして彼ら自身のために存在する公共体を形成すべき」なのであった。しかしヘルバルトは，ナポレオン支配下の危機の時代に国家救済のための提案を堂々と行なった勇気をたたえながらも，しかしそのような状態の時に「ひじょうに厳粛な熱心さのあらゆる価値をもって全国民の心に訴えた」からこそ，一そう思慮深い考察を欠くべきではなかったと思うのである。

---

(7) (6)の S. 23.
(8) (6)の S. 14.
(9) 'Briefe über die Anwendung der Psychologie auf die Pädagogik' 全集第9巻，S. 350.
(10) (2)の S. 83.

なぜなら家庭的精神の影響もなく，「他から切り離されて密集して生活している少年たちの間では，あらゆる野蛮な悪い心情が初めから生じるにちがいない[11]」からで，そこでは力の強いものだけが支配し，また生徒たちの間に「社交的精神」が形成され，教師は「よそものとして見られ，観察され，判断され，なるべく避けられ」「可能な限り排斥される」からであり，そこでの子供たちは「教師によりむしろ遊び仲間の方に胸襟を開く」からであるという[12]。こういうわけで，学校という名の生徒たちの集まりも，教師が子供たち一人々々を十分指導することができないという理由で，原理的には否定されるのである。彼は「一般的に言って若者の陶冶が，機械による工場のごとく，個々人に対する考慮なしに十把一からげ的に遂行され，それで利益がありうる仕事であるかのよう」に思っている「学校に対する偏愛」を批判している[13]。

ヘルバルトが理想とする真に道徳的な教育というのは，父と母とがただ一人の子供を持ち，彼に対して最も親密な人間であり，長期間そうでありつづけるように連帯して働きかける時ほど，確実に行なわれる時はないのであり，その時，必要があれば再び両親が遠ざけることのできる他の社会へは，徐々に接近させるのだという[14]。しかしこれはあくまで理想であって，現実の家庭はひじょうにしばしば，種々の理由で（忙しすぎたり，貧困すぎたり，ぜいたくすぎたり）教育に適さぬ場である場合が多い。したがって家庭教育という理想は「家庭においては正しい教育学的諸概念が獲得されていて，気まぐれや生半可な知識がその地位を占領していないことを前提している[15]」のである。しかしこの条件を満たすことは一般には極めて困難である。そこで「教育は家庭の仕事であり，それはそこから出発し，そして大部分そこへ戻ってくる」ということは絶対忘れてはならないのであるが，しかし「多面的そして高価な教授の必要性のみが，教育を学校の中へ追いやる[16]」と，再び学校は，たとえ必要悪としてでも再登場してくるのである。ただその際へ

---

(11) 以上(9)の S. 348～9。また「この世のいかなるものも，多くの子供たちを一点に積み重ねることほど，本当に道徳的な教育をそんなにひどく困難にすることはない」とフィヒテ批判の別の論文でのべている（(12)の S. 8）。

(12) 'Über das Verhältnis des Idealismus zur Pädagogik' (1831–2)，全集第10巻，S. 8。子供たちは子供たち自身の仲間から何ものも学ばず，むしろ道徳的に堕落するのみとのこの論理の中に，われわれはヘルバルトの「知識を通しての徳育」というテーゼの限界を認めざるを得ない。彼の教育学では常に表象を与えるべき教師が必要であるが，子供たちの集団にはそれがないからである。しかし子供たちがその集団から何も学ばない，というのは明らかに誤まりである。

(13) (9)の S. 349.

(14) (12)の S. 8.

(15) 'Umriß pädagogischer Vorlesungen' (1835) §189 全集第10巻，S. 133.

(16) (1)の第12章，S. 137。ヘルバルトのこのような家庭教育重視の主張を，家庭教師を雇うことができるブルジョア特権階級のみに妥当するものだと批判することもできるが（例えば Die 'Pädagogik Herbarts' "Pädagogik" 11巻8号，Karl Schrader)，われわれは他方，教育のより本質的，原初的な性格としてそれをうけとめ，したがって学校依存，親の教育責任放棄へのいましめをそこに発見することもできるし（オーストリア，ベルギー，デンマーク，フィンランド，西独，イタリア，オランダ，スェーデン，イギリスなどヨーロッパの多くの国で，今日でも家庭での義務教育の就学を認めていることからも明らかなように，ヨーロッパでは，親の教育権ないし責任は確固たる伝統である)，何よりも彼の時代においては，国家の干渉を避けるために，家庭教育とか家庭教師教育とかが，新教育学のスローガンであったことを計算に入れるべきである。

ルバルトは，生徒の個性を圧殺しないため，また人間社会の分業への絶大なる信頼のゆえに，多様な学校制度と生徒たちの分離とを意図すべきだと考えたのである。[17]

しかしこのような学校制度は，ただでさえドイツの小邦分立によって共通の国民意識の形成が阻害され，そのことがフランスのドイツ支配に対して絶好の〝思う壺〟となっているのに，一層この状況に拍車をかけることになるのではないか。「われわれドイツ人は……あまりにも愛国的でない」[18]と残念がっていた彼にそんなことができるはずがない。そうかといってナポレオン占領下にフィヒテがナショナリズム感を生むために考えたあの集団教育法は彼には採用できない。こうして迷ったヘルバルトは，教育方法の個別主義を，すべての生徒に多面的興味を陶冶することによって補って，国民精神の統一性を保つことを実現しようとしたのであった。これが彼の教育論の第三の特色である多面的6種興味論の持つ意義である。

ここでは興味はなぜ多面的でなければならないかについてのべられている所を引用しておこう。「人間の社会はずっと以前から，どの人間も自分が仕上げることを適切に行なうことができるためには，分業が必要だということを発見してきた。しかし仕事がより限定されより分化されればされるほど，個々人が他のあらゆる人々から受容することもそれだけ多面的となる。ところで精神的感受性は精神的親近性に，精神的親近性は類似的精神活動に基づいている。ゆえに，本来の人間性というより高次な領域の中においては，労働はお互いのことを理解できないまでに分裂されるべきでない，ということが明らかである。すべての人はすべての事に対して愛情を持つべきであるが，一つの事柄においての熟達者でもなければならない」。[19] ここに有機体の各組織の持つ，あの性格が描かれている。

以上が，ヘルバルトが理想とする有機体的国家の成員を陶冶するための彼の教育論の3特色であった。彼は〝国家を教育する〟にはこうするより他に方法がないと思った。だから国家内の諸力のシステムがすでに本質的に変化してしまい，奉仕者・自由人・名望家そして支配者の関係がもはや以前の関係でない時に，いかに古い形態を恣意的に呼び戻しても何の役にも立たない。またそうした国家内で「共通精神に新しい対象を示し，共通精神に新しい方向を与えるために，例えば対外戦などしばしば使用される手段でさえ，一時的緩和剤にすぎず，古代ローマとかナポレオン下のフランス〔そしてその後のアメリカとか日本など，とは言ってないが〕などの国家が，絶えざる冒険と征圧とによって，人工的に巧みな存続を得たということは，内的欠陥へのごまかし」[20]なのだ。かくて教育が国家改造の手段となる。しかしその教育が，もし現実の国家権力の手によって導かれるとすれば，これは大なる矛盾である。こうしてヘルバルトの国家による教育批判論が論理必然的に形成されてくるのであった。

---

(17) (15)の §200 S. 135。また「しかし〔プラトンの〕生活様式の分轄の指示，それに関係する教育の多様性への結論は，全く重要で不可避のものだ」ともいっている（(22)の S. 76)。

(18) (2)の S. 67.

(19) (2)の S. 28.

(20) (1)の第11章，S. 128.

そもそも国家というものは，ある時には水夫や兵士，役人を必要とするが，ある時は彼らを解雇してしまう。国家は新しい鉱脈が発見されれば鉱夫を，町が焼失すれば大工を利用するが，国家にとってはただ彼らの仕事のみがその場その場で重要なのであって，そこでは人間の人格性など考慮に入れられているわけでは全くない。[21] 国家はいつも第一に現在の成人のこと，自分自身のことを心配している。だから「もし国家が，必要なものからなお何か余りを残した時には，これを教育に多分，慈悲深い贈物として施す」ぐらいにしか教育のことを考えない。「国家の理念は，人間という者は徐々にしか成長せず，理性的人格になるために教育を必要とするということさえ知らない」[22] からだ。だからこのような国家に教育のことを委ねるわけにはいかず，また「諸社会は真の必要性から生まれるが，しかし国家はこの諸社会の結果」であり，しかも大多数の人間は小さな社会に住み，そのために人々は「小社会での私生活を教育一般の目的」とするからには［つまり教育の私事性の原理］，「まじめに善いもの，さらに最善のものを欲する人々は，教育を政治的テコとして考えることを警戒する」のであり，「ゆえに可能な限り教育の仕事は，政治的意図の圧力から自由になり，人間の固有の本性に従うことが追求される」のである。[23]

しかしヘルバルトによれば現実には，国家の意志に反する教育は極めて困難であり，また国家の諸配慮なしには必要な諸援助が欠けるだろうから，このことは「国家の贈物」とならざるを得ないという。このあまり感じのよくない言葉はしかし，「国家は自己の目的のための手段を教育の中に求めはしない。国家はにもかかわらず，教育に対して寛容に援助を提供する」[24] という，いわゆる〝サポート　バット　ノット　コントロール〟の近代公教育行政の理念的原理を提唱しているのである。これがつまり条件整備の原理であり，この当時の新理論であった。国家は，「ただ個々人の才能・誠実・勤勉・天分・熟練のみが獲得しうるところの，つまりそれらのものの自由な活動によって創造され，それらのものの模範によって拡大されうる」教育の仕事が，自分の「管理と監督」に委ねられているなどと思ってはならないのであって，教育に関する国家の仕事はただ「障害を除き，道を平らにし，機会を整え，そして鼓舞激励を与える」ことのみなのである。それだけでも人類に対して国家は十分に偉大な尊敬すべき功績を果しているのである。[25]

ではヘルバルトは具体的にどのような教育制度を理想的と思っていたのか，ここで彼の提案する独特の見取図を見てみよう。彼は数年来，しばしば，個々人のきめ細かい取扱いが少年たちの大群によって圧殺されることなく，多面的な知識の応用が，規定のカリキュラムによって制限されることなく，しかし人が家庭教師に不当に要求しがちな博識ぶりは，専門的研究のためにはその道の精通者たちによってしかるべく配慮されることによって，免除される制度とはいかなる種類のものか，また国家によって認められず，ただ家庭にのみ属している家庭教師と，あまりにも

(21) 'Über die gute Sache' (1819) 全集第4巻，S. 569，および(15)の § 184, S. 131.
(22) 'Über Erziehung unter öffentlicher Mitwirkung' (1810)，全集第3巻，S. 78.
(23) (1)の第11章，S. 135.
(24) (1)の第11章，S. 135.
(25) 以上(2)の S. 84.

家庭から離れ，あまりにも国家に対して責任を負うように決定され，その公的性格のゆえに，芸術家の生命の自由さを喪失してしまっている学校教師との中間の教師とはいかなるものか，などについて考えてきたという。そして彼は「国家と家庭との間には，より小さな地方自治共同体 Kommune である町がある」ということを発見したのである。これは彼が既述のような社会論・上昇的国家論を持っていたがゆえに発見できたのであった。

そしてコミューンに医者が必要なごとく，教師も必要なのだ。ここでヘルバルトは，喩えていえば，大病院の医者と町医者との間に性格・任務の違いがあり役割の分担をしているように，教師にも二種類を区別するのである。子供の家庭的・社会的環境を熟知している一方の（家庭）教師は，討論・対話の時間を持ち，文字による訓練を指導したり，さらに学校のどの時間に，親から委ねられた生徒を出席させればよいかを決定したりするのである。しかし諸学問の大部分は，公けの学校に任せる。この学校は，厳密な脈絡のあるカリキュラムに生徒たちの一人一人を縛りつけることは断念しなければならない。そんなことをすれば，学校のカリキュラムのメニューを生徒たちが選択することができなくなるからだ。

このようにしてヘルバルトは，家庭教育の持つ個性的であるが浅薄・偏狭になりやすい性格と，学校教育の専門的ではあるが没個性的で専断的に陥りがちな性格との止揚を求めたのであった。だから「コミューンの仕事として経営されている時には，教育は同時に公的にも家庭的にもなり，そしてしばしば話題にのぼる，あれやこれやの種類の長所を統一させるだろう[26]」という言葉，つまり現在では全く珍らしくもない公立学校（しかしコミューン立学校は厳密には今日でも意義を持っているが）の勧めは，世俗的学校とは一般に国王の臣民鋳造のための国立学校（国家から相対的にしろ独立した町村など存在しなかったという意味で）でしかなかった時代へのまさに造反であったといえる。ここにヘルバルトの教育の理念追求の一応の結論が出たようである。

しかし教育は国家からの相対的独立を守り，社会にその基礎をおけば，それで十分であろうか。しかし現実の諸社会の中にも，あの階級の区別が存在し，教育全体の上に害を及ぼしている。たとえば名望家の子供は，優秀な性質を持っていなくても，周囲の状況から先入的にそう思い込み，その結果彼らは辛苦を無視し，結局最上の最強の教育的諸能力を獲得することができない。他方下位階級の子供たちは，もし抑圧に屈しない時には，別の諸原理，つまり利益とか名誉欲に駆られて努力する[27]。しかしヘルバルトにとって，その両者とも教育の腐敗なのであり，ここにおいても教育は，自己に適する「気候」をさらに探さねばならない。

ではその「気候」とは何なのか？　彼のこの問に対する回答は，例えば次のような言葉の中に見つけることができる。「青少年への教授は，人間が他の人間たちの間で占める地位の上に非常に強力な影響を与えるということを正しく考慮して，われわれは，教授は最も強力な教育学的諸

---

(26) 以上(22)の S. 81～2.
(27) 以上(1)の第11章，S. 136.

力に属し，そして教育学的根拠に従って配列されねばならないと主張する[28]」。教育学的根拠とは何か？「真の教育は，正しい源泉——真の興味，真の気力・芸術感情——から生じないいかなる仕事も行なわない[29]」ということ。

こうしてヘルバルトによれば，教育はコミューンに基礎をおき（つまり字義通り教育のコミュニズム），その内実は，興味という教育独自の論理の中に，適切な「気候」を求めねばならないのであった。彼の教育学は現実国家からの干渉を嫌う点では，〝政治的中立〟の教育学であったが，現実国家を理想国家に教育するための教育学という意味では，極めて政治的なものであった。

7. それは適応の教育学か？

〝イエナ詣〟の留学生たちによってアメリカに全米ヘルバルト協会が設立されたのは1892年の事である。その頃，同協会に集まった人たちは，その中心的人物である Charles De Garmo にしろ，McMurry 兄弟にしろ，多かれ少なかれ，ヘルバルト教育学の改革的側面をそれぞれの様式で継承していた。Merle Curti によれば，ヘルバルト主義者たちは，個人の改革が学校の主要任務であり，個々人の道徳性は，当時の社会的不正救済の最良の手段と信じた教育者たちの第一人者であったという。1899年のヘルバルト協会第5年報の「教育における社会目的」と題する論文の中では，I. W. Howerth が，非妥協的な態度で利潤形成経済を告発し，そして競争的で冷酷にも不当な社会の代りに，民主的で協力的な社会を要求していた[1]。

イギリスにおいてはヘルバルト主義は一般的には教授法として受容されたのであるが，F. H. Hayward はこの状況を愁い，その倫理的・道徳的側面に注目させるために奮闘するのであるが，彼は，ヘルバルトの「愚者は道徳的ではありえぬ」（講義綱要）とのテーゼに着目して，「ヘルバルト主義の至上の栄誉は，いかに緊密に知性と徳，無知と悪徳とが結びついているかを発見したことである。多くの汎愛主義者たちの最大のエラーは，〔窮民救済の〕失敗の秘密がしばしば理念の欠如，支離滅裂，薄弱さであることに気がつかなかったことである[2]」とし，犯罪防止的に，「愚なる」貧民大衆への多面的興味による徳育の効果を訴えたのである。ヘルバルト主義を道徳上の「福音書」と彼が崇める理由である。

ここには資本主義社会のホコロビをヘルバルト主義の徳育でつくろおうとの意図が明白である。そのことの善悪はここでは問うことはできないが，しかしヘルバルト教育学を媒介にして社会の改良に積極的にとり組もうとする意気込みはよく感じられるのである。ところがその後のアメリカの多くの学者たちのヘルバルト解釈をみてみると，そこに奇妙な一致が存在することに気がつく。数例を拾ってみよう。E. P. Cubberly：ヘルバルトの教育目的は「組織化された社会でうま

---

(28) (1)の第12章，S. 141.

(29) (1)の第11章，S. 136. ここで彼はさきにせっかく指摘した階級存在との対決を興味論の中に解消してしまったのである。

(1) "The Social Ideas of American Educators" p. 254, p. 244.

(2) "The Critics of Herbartianism" (1903) p. 15.

く生活できるように人間を準備すること」である。[3] A. E. Meyer:「ヘルバルトが考える所によれば，教育の目的とは子供たちを既存の社会秩序の中で生活できるように準備してやることであった」。[4] P. Monroe: その「教育目的は品性，即ち社会において正しく自己の役割を果そうとする意志とされ」[5]た。R. Freeman Butts:「ヘルバルトは，教育はその展望と目的において，主として道徳的でなければならないと主張した。彼にとってこのことは……必ずしも道徳の宗教的概念ではなくて，むしろ個人の社会への適応の問題であった」[6]。

ここでは社会の改革という視点は完全に欠落して，専ら既成社会への子供たちの適応の準備手段として，ヘルバルト教育学は解説されている。

彼の教育学がいかに適応の教育学でないかは既に見てきたところである。なおここでは彼が，「(社会の習慣に順応することを目的とする) konventionell 教育は，現存する悪をさらに継続させようとする」[7]と，ロックの保守主義教育学に反対し，また「経験は全く体系的でないから，もしわれわれがただ経験にくっついて考え続けていくだけなら，せいぜい多様に混り合いからみ合った思想しか獲得できない」のであって，「論理的推論」に必要な「科学的想像」は「所与のものの絶えざる分析」によって得られるのだ，[8] と経験主義を批判している点を指摘しておこう。

8. ヘルバルトをめぐる2人の証人

次にナチズムとの関係でヘルバルト教育学が持った現実的意味を知るために，われわれは2人の証人に登場してもらおう。その一人はクリークと並んでナチスの代表的御用教育学者であったボイムラーである。ベルリン大学の哲学・政治的教育学教授であった Alfred Baeumler (1887～?) は，その『政治と教育』(1937) という著作の中で，だいたい次のように形式的陶冶を批判している。[1]

今や準備性の原理に基づく学校は崩壊し，抽象的教授学に支配された非政治的な学校の時代は過ぎ去り，政治的学校の時代が始まった。長い苦しい経験の末に「青年は待たない」ということが発見された。これからは人間を一切の可能性に開かれている存在などと見ず，自然的歴史的秩序の中における現実的人間として認識する新しい学問が必要であり，将来の教育学は最も広い意味での政治学に基礎づけられるだろう。そもそも準備性ほど教育の本質に背くことはなはだしいものはない。政治的現実は，今ここにおける決定を要求して準備の予猶など許さない……。

---

(3) "The History of Education" (1948) p. 760.
(4) "The Development of Education in the 20th Century" p. 18.
(5) 『教育史概説』川崎源訳 p. 231 (原書1907年)。
(6) "A Cultural History of Education" (1947) p. 438.
(7) "Allgemeine Pädagogik", 全集第2巻, S. 7.
(8) (7)の S. 60.
(1) "Politik und Erziehung" 所収 'Die Grenzen der formalen Bildung' S. 67–91。なおこの論文の邦訳は『民族と教育』(昭20年) 篠原陽二訳に所収。

イタリアにおいて，ファシスト警察の弾圧によって獄中にいたA・グラムシが，「今日，無関心的（直接的には或ることに関心をもたない）で，形成的であるあらゆるタイプの学校を廃止する傾向，あるいは……生徒の運命と将来の活動とがあらかじめ決定される専門的な職業学校をいよいよ普及させる傾向がある[2]」とファシストによる準備性原理の無視を批判していたと同じ頃，ボイムラーはこのように，まさにその準備的陶冶が既に時代の要求に合わなくなったことを指摘し，そしてこの原理の代表者と彼が言うヘルバルトを非難していく。

ヘルバルトにとって「最上の教育とは生徒を全く自立的に発達させる教育」（S. 77）である。このゆえに教育者は，その生徒に直接に影響し，感情的手段によって動かすことは禁ぜられ，ただ間接的に（つまり教授・教材を通して）働きかけることのみ許される。意志陶冶もまた思想圏を通ずる廻り道によって行なわれるべきで，直接に即ち「範例」とか「命令，社会での相互的存在および相互的行動」によって行なわれてはならない。生徒の想像・心情・意志への直接的働きかけは，ヘルバルトによればすべて重大な危険を伴なう。なぜなら「直接的影響は感動的手段を利用せざるを得ないが，しかしこの手段ほど悪用されやすいものはないからである。これは生徒の心を『動揺させ』，均衡と連続性に対する保証を全く与えず」「方法的に行なわれた教授のみから得られるもの」つまり「内的生活全体，そして同時に行為を確実に規定する表象連関」を生徒の中に作り出すことができないからである（S. 77～8）。ゆえにヘルバルトにおいては，直接的・政治的性格教育や意志教育は「攪乱の原理」とみなされ拒絶されるのである[3]。

明治のヘルバルト学者とは違って，ここではヘルバルト教育思想の本質的側面が正しく紹介されている。しかしボイムラーはまさに彼が正しく指摘したヘルバルト教育学の性格のゆえに，それを打倒し葬り去らねばならなかった。ドイツの1930年代は，教師と指導者の統一を要求した。ヘルバルトはしかし，指導者 Führer のあの雄弁で感動的な直接的訓育を排斥するのである。ではボイムラーはいかなる武器でヘルバルトを倒そうとしたか。答はすでに垣間みたごとく極めて単純であった。「（ヘルバルトの）この体系は唯一つ誤りを犯している。つまり青年は待つと前提しているのだ。しかし青年は現在に生き，学校においてもまた現在性を欲するのだ」（S. 80）と。

しかしわれわれは，ボイムラーの武器に少なくとも三つの疑惑を抱かざるを得ない。第一に，ヘルバルトが主張しボイムラー自身が正しく紹介した，直接的訓育の危険性を無視すべきほどに，「青年は待たない」との原理は重大であるかどうか。第二にヘルバルトの知識を通しての教育は果して絶対的に現在性と対立するか。教育とは程度の差こそあれすべて準備的ではないのか。第三に「青年の教育」と「教育一般」とが混同されてはいないかと。それはともかく，とにかくボイムラーはこのような論理で，「範例と模範，共同の歌と共同のリズムによる直接的働きかけ」

---

(2) 『グラムシ選集』3，合同出版社，p. 119.

(3) ここでボイムラーが指摘している，ヘルバルトによる「教授なき教育」批判は，たとえば "Allgemeine Pädagogik"（全集第2巻）の S. 11, S. 112 などにみられる。

「真の指導者が生み出す感情的な団結」による教育，「生の炎は人から人へと燃え移り，心は共同体験の雰囲気に包まれて成長し，そして精神は感激によって展開する」(S. 81)，そのような教育を期待した。

かくてボイムラーは言う。「ナチズム革新によってドイツの学校は文明的硬直の危険から解放された。この革新は……『相まみえて』の直接的教育の優位を復活した。組織における教育（HJ〔ヒットラー・青年隊〕・SA〔突撃隊〕・SS〔親衛隊〕・労働奉仕）が立法化されて全体系に組み込まれた」(S. 85) と。では集団教育の嫌いなヘルバルトに代って，このような感情的把握の体系を持つ教育学者としてボイムラーは一体誰を推薦しただろうか。それは「感情的教育の古典的代表者としてわれわれの間に生き続けている」(S. 82) ペスタロッチであった。[4]

われわれの第二の証人は，しかしそのペスタロッチの亜流とボイムラーに非難される Herman Nohl (1879～1960) である。ボイムラーにとって，期待される教育学者像の面を汚すノールはよほど気に喰わぬ存在であっただろうが，この非難の理由は一口にいえば，ノールがヘルバルトの擁護者であったからである。ノールの1931年の論文に「教授学における両極性」[5]というのがある。ドイツ資本主義の再建が完了し，ドイツ政界の再編が済んだのが1929年である。ナチスはドイツ国家人民党や鉄兜団（在郷軍人の指導する全ドイツ的軍国主義組織）と結んで勢力を増大させ，資本家や大農業家からの援助でさらに SA, HJ その他を組織した。[6] ノールのこの論文は，こうした暗雲逆巻く重大な時代背景を背負っていた。彼は当時の学校と青年諸団体との間の特殊な矛盾，つまり前者では極端に自由な活動と個人化が支配的であり，後者では厳しい規律と無制限な服従にまで通ずる画一への準備が優勢，という事情を指摘し，以下次のように続けている。

学校と青年とは，明白に決定的な場所，つまり人格形成という所で分裂している。学校は教師と生徒との関係を，そして自己の自由な発達への生徒の権利（これをあらゆる党派の青年自身が激情的に拒否する）を擁護するものだ。学校改革の仕事に参加し，その偉大な時代の思想をそこで骨折って戦かい貫徹してきた，古き青年運動の指導者たちは，青年のこの変化に驚きそれに反対し，そしてこの変化を政治的反動として説明する傾向を持っている。事実，文学の中では既に，全改革を「自由主義的」無謀行為とみなし，勇敢なジエスチャーで再び旧式の記憶学校・強制・そして鞭の罰でさえも推薦するがごとき時代逆行の声が生じてきている。ここ

---

(4) ナチズム教育学者がヘルバルトを批判してペスタロッチを高く買うのは何もボイムラーに限らず，Ernst Krieck もその著書 "National Politische Erziehung" (1932年) の中で，次のようにペスタロッチを利用的に評価している。「恍惚家」ペスタロッチは，「自分自身およびその子供たちの群れを，ひじょうに緊張した，感受性の高い心の状態にまで，原始的な手段，特にシュプレヒコール法で高める方法を発見した」「こうした手段でもって彼は……特に重要なことであるが，教えるというやり方では一般に不可能なこと，つまり子供たちを，心的に高まった，すばやい感情へ，ゲマインシャフトへ溶け込ませた」「この方法の意味内容は，ナチズムの大衆運動のそれとは全く異なるが，しかしその基本と効果は同一である」(S. 39–40)。

(5) 'Die Poralität in der Didaktik' "Erziehung" 誌 Feb. 1931年。

(6) 『ナチズム』村瀬興雄，p. 188.

において教育学は死活問題をつきつけられている。教育学はかつて獲得したものを失なわぬよう，非常に緊張して警戒しなければならない。と同時に子供の精神的過程は，過去の改革運動つまり古き青年運動が意味したよりもなお一層複雑なものであることを知らねばならない。なぜならあの運動は，一面的に方向づけられ，それなくしては生命を全体として把握することのできない両極性を看過してしまったからである（S. 277）。

この精神の両極性についてのペスタロッチ，フレーベルの意義を一応評価しながらも，ノールは「その決定的に重要な場で両極的に構成されている」のは，ヘルバルトの教育学であるとする。つまり専心と致思との方法上の交替，体験への没頭とその人格統一への解消，さらにノールはあげていないがより適切な例であると思う認識的興味と共感的興味の区別，さらには彼の倫理学の最高の理念である「内的自由」が，洞察と意志との一致であることなどが，その証拠なのである。結局，知識的なものと感情的なものとの交替が，「人間精神の呼吸」[7]と呼ばれるほど，人間の生命にとって不可欠根本的であると示したのがヘルバルトだというのである。だから「ヘルバルトの方法は，たとえ他の点では否定できるとしても，精神生活の両極的構造への洞察は正しく」「あらゆる記憶学校に反対して興味の優位性を指示し，しかも同時にすべての一面的体験学校に抵抗して，生命の不可欠の要素としての概念的形式と系統的連関の重要性を教えるものだ」（S. 282）と彼はヘルバルトを高く評価した。

しかしこのような評価は，ひじょうな勇気を要したことは想像にかたくない。彼は明らかに，ただただ激情と非合理的服従とでもって，直接的に青年の心をつかむ当時の青年諸団体のことを攻撃したのである。ではなぜこのような事になってしまったのか。20世紀の曙光とともに開始された改革教育学は，旧教育の記憶性・強制性に反対し子供の芸術的諸能力の喚起で始まったが，人々はそのスローガンのあまりのまぶしさに眩惑され，子供にはただ自由が与えられ，「教授学は創造性一本槍で，柔弱と自由な個人的活動の極を求めて展開」した（S. 282）。そのためにそこでは知識は軽視され合理的思考訓練は欠如した。反動の触手はこの偏向に好機を得て，知育の欠如を一層助長する反面，一夜にして甲羅のない蟹となって自由に疲れた（全責任を自分で負わねばならないから）青年たちのうつろな心を再び統制でもってひきつけた。そして「グロテスクな群像が，既に再び強制のための旧式の必需品，とりわけムチをひきずり出している」という恐るべき事態を招くことになった。こうした状況下で教育学は，正しくつまり教育学的に自律して歩むべき道を発見しなければならない。このことは教育学が「一つの政治的潮流とか自由主義の流れから，新しい反対の流れに揺れ動くことではなくて，勇敢に自己の自由を擁護しながら，精神生活の真の永遠の両極的構造と，その構成のダイナミックな法則への洞察から，正しい結論をひき出すことだ」（S. 284）とノールは訴えた。しかしこの訴えも空しく2年後の1933年1月にはナチスが政権をとり，教育学は破滅的に一極に荷電してしまうのであった。

---

(7) この言葉はたとえば“Allgemeine Pädagogik”（全集第2巻） S. 88 にみられる。

われわれはこうして，ナチズムに対する態度を大きく異にする2人の証人の発言から，ヘルバルト教育学という一教育学が，1930年代ドイツという一歴史的時点で，どんな政治的役割を果していたかを知ろうとした。2人の証言からだけでは断定することはできないが，ヘルバルト教育学はこの時，本来の意図に従って機能したように思われる。これに反して明治ヘルバルト主義はそれに反して働いた。少なくともナチスがヘルバルト教育学を利用したとの評価は全面的には正しくないことは明らかであると言える。むしろ逆ではなかったか。ここにボイムラーが，ヘルバルトは「最上の教育」を「生徒を全く自律的に発達させる教育」などとしたと非難（？）し，ヘルバルト自身が，「生徒自身をして善を選び悪を拒否するものとせよ」[8]と命じたヘルバルト教育学の面目がある。

9. むすび

ヘルバルト教育学はE・フロムいうところの「第一次的絆」からの解放の教育学であった。それは人間の個性化・個別化を追求した。しかしこのいわば孤独化はその後資本主義社会という他との競争を原理とする世界で進行していったがゆえに，そこにはいわゆる大衆社会現象が生まれ，他者への人間的関心は生じえず，そして孤独，およびそこから生まれる不安を回避する道は，「ただ一つ有効な」「すべての人間との積極的な連帯と，愛情や仕事という自発的な行為」[1]に求められることができなかった。そのためにせっかく「第一次的絆」を断ち切って自由になりえたのに，再びもとの木阿弥となる，外界・人間への服従への強力な傾向が発生した。ファシズム状況成立の重要な心理的要因である。

とすればヘルバルト教育学は，ひじょうに間接的には，あるいは極めて深い所では，やはりファシズムの成立に役立っていたのであろうか。この時われわれは，もう一度個別化を主張したヘルバルト教育学に立ちもどってみる必要がある。その時われわれは，個別化がもたらす不安・孤独化の歯止めとして，彼が全体との統一性，とりわけ多面的興味（多面的活動となりえぬ所に彼の限界があったが）という概念を強調していたことを思い出すだろう。しかしただ資本主義社会ではそれはできない相談であったのだが。

一方われわれは，戦前戦中の臨戦的教育が，まさにヘルバルトが嫌悪，ボイムラー推薦の，感情的直接把握の教育であったことを知っている。悲劇の終りだけ見ても，そこへ至るまでの論理的流れが解らないために全く悲しくはならないのに，それをムリヤリ悲しませ，悲しくならない時には頭を撲ってでも涙を流させ，そうするうち，皆が泣いているので自分も泣くというのがそういった教育であった。そこでは〝天皇のため〟〝国のため〟という結論だけが強要され暗記させられたが，天皇制が何で，国家の本質が何か，その論理的認識を全く欠いた若者たちが，驚くべきことに（むしろ当然にというべきかも知れない），自分や家族の悲惨の元凶の利益のため

(8) 'Über die ästhetische Darstellung der Welt...' 全集第2巻，S. 261.
(1) 『自由からの逃走』日高六郎訳，p. 45.

に，自分と同種の犠牲者である若者たちとの戦いに自らすすんで参加するという事態も生じた。

今日，「天皇を愛すること」＝「国を愛すること」式の〝なつかしい〟愛国感教育論も，再起の機会をうかがってウロウロしているが，今度われわれが悲劇を演じる時にはマス・メディアの発達のためにもっと合理化された台本を，より積極的に無意識的に演ずるのではないだろうか。いや既に開演中でもある。つまり人間生活のより基底的な所で，手に負えないような大規模な，没論理的印象教育現象が進行し，国民はそれに慣れていっている。——たとえば巨大な近代広告は理性にではなく感情に訴える。催眠術の暗示のように，その目的物をまず感情的に印象づけ，それから知的に説明する。このような広告方法はあらゆる手段で買手に印象づけようとする。すなわち同じことを何度も繰り返したり，社交界の婦人や有名な拳闘家にある商標の煙草をくわえさせ，権威あるイメージを起させようとしたり，美しい少女の性的な刺激によって買手をひきつけ……，さらにあるシャツや石鹸を買うことで，なにか全生涯が突然に変化するような空想を刺激したりしている。これらすべての方法は本質的に非合理的である。それらは商品の性質には関係なく，阿片や完全な催眠術のように，買手の批判力を窒息させ殺している。[(2)]

このようなフロムの批判は，引用付号をつける必要がないほど，われわれの日常の生活にピッタリである。しかもこれが商品宣伝の世界だけのことではないから悲劇は一層深刻化する。テレビ政見発表のためにメイカップに労力を浪費している代議士。独裁的により強力なものに引きずられていくことを潜在意識的に憧憬しながら根性ものドラマに感激している，スポイルさえ自由裁量をもてあました子供たち。マスコミや体制の大衆操作による義務感・虚栄心から，単なる展示会をのぞいてみるだけに炎天下に数時間の列を作り，忍従の美徳の復活をも実証した大人たち。こうした状況の中に，精神の両極性，論理的知識教育を強調するヘルバルトも再考してみる価値もある。

しかし正しい知識を方法的に与えさえすれば，あとは教師との直接的個人的関係の中で（訓育），それは道徳的意志と結合するだろうと考えたヘルバルトはあまりにも楽観的すぎた。道徳的意志の発動には，社会的条件をも考慮しなければならないが，やはり集団ないし他者の存在が必要である。そこで初めて各人は，ある知識の道徳的正しさの実地検証を行なうことができ，それを意志に結びつけることができるからである。しかしヘルバルトは，ナポレオンへの復しゅうのために国中がカッカしている当時への状況判断も加えて，集団教育は結局軍隊的な強制教育になると恐れ，それを原理的に否定した。しかしいくら集団が必要であるからといって，訓育の場としての集団や，体制の感情的非合理的支配と闘うための諸組織が，再びボイムラー特選の「共同の歌と共同のリズムによる」「指導者が生み出す感情的団結」の組織，つまり「精神の呼吸」をするのを忘れた集団に堕落してはならないのはもちろんである。

（大学院博士課程）

---

(2) (1)の p. 145.